蒼々たる云々―綽約はやさしく美しい貌。莊子に藐姑射山有二神人一居焉肌膚若二冰雪一綽約若二處子一とあるをとる。珊々たる云々―隋の趙師雄羅浮にて清麗の美人に逢ひ共に酒を飲み醉臥し覺めて見れば身は大梅樹の下に在りといふ故事。惆天滿―心あり。にかく延喜の御世―醍醐帝

菅原傳授手習鑑

第一

蒼々たる姑射の松、化して綽約の美人と顯はれ、珊々たる羅浮山の梅、夢に清麗の佳人となる、皆是擬議して變化をなす、豈誠の木精ならんや。唐土許か日の本にも、人を以て名付るに、松と呼梅といひ、或は櫻に准れば、花にも情天滿、大自在天神の御自愛有し御神詠、末世に傳へて有がたし。此神いまだ人臣にまします時、菅原の道眞と申奉り、文學に達し、筆道の奥儀を極め給へば、才學智德兼備り、右大臣に推任有、權威に漫る左大臣、藤原の時平に座を列ね、菅丞相と敬はれ、君を守護し奉らる、延喜の御代ぞ豐なる。然るに主上此程より、御風の心地迚、病の床に臥給ふ。天顏を窺ひ奉らんと、御弟宮無品齋世親王、參内の御供には、院の廳の官人判官代輝國、階下に伺公仕れば、席を正して丞相に打向はせ給ひ、「今朝院參致せし所、法皇仰有樣は、當今

の御惱日を追て快然ならず、急ぎ齋世に參内し、龍顏を拜し、御樣子有の儘に告知らせよ、と判官代を相添らる。御樣躰いかゞ渡らせ給ふやらん」菅丞相正笏有、聞「さして御變もなく候。委くは道眞に御尋有んよりは、直に天氣を窺ひ給へ」類「然らば左樣に致さん」と、時平にも挨拶有、常寧殿に入給ふ。かゝる所へ式部省の下司、春藤玄蕃允友景罷出、庭上に頭を下ゲ、「今度、渤海國より來朝せし唐僧、天蘭敬が願ひには、唐土の徽宗皇帝、當今の聖德を傳へ聞、何卒天顏を拜し奉り、御姿を畫に寫し歸國せよ。其畫を則日本の帝と思ひ、對面せんとの望に付、數々の饋物、則是に候」と庭上に餝らすれば、菅丞相聞給ひ、「コハ珍らか成唐僧が願ひ、當今延喜の帝、聖王にて在す事隱なく、御姿を拜せんと、唐の帝の望は、直に我國の譽なれ共、折惡敷天子の御惱。有の儘に云聞せ、音物も唐僧も、唐土へ歸されんや、時平の了簡ましますか」と、仰に冠打振て、時「そふでない道眞、御病氣と申聞しても、よも誠には思ふまじ。延喜の帝は聖王でも、趨跛か嗜か缺唇か膝行か、天皇らしうない形故、病氣といふは間に合と、いはるゝは日本の疵、面倒な事いはさんより、御形代を拵へ、天皇と僞つて唐僧に拜さすれば、何事無ふ事は濟、誰彼と云んより、此時平が代を勤め、衮龍の御衣を著し、天子

瞎か缺唇―かた目かいぐちか
衮龍の御衣―天皇陛下の御正装

鹿を馬―秦の趙高の故事

三善―見にかく

に成て對面せん」と一口に言放す、謀叛の萌ぞ恐ろしき。判官代輝國、階の下につつと寄、「事新敷嚴命、唐土の天蘭敬は、時平公の御姿を寫しには參るまじ。皆上つて頤廣く、顴高き延喜帝、唐僧がよも呑込まい。神武以來獨の惡王、武烈天皇の名代ならば、時平公が幸究竟、當今の御代とは、鹿を馬との出損ひ、ハヽヽ御無用」と嘲笑ふ。時「ヤア舌長し輝國、踏れやつ」と呵り付、「ヤア〳〵立蕃、天蘭敬を内裏へ伴へ。天子には此時平用意せん」と、立つ所を菅丞相とどめ給ひ、「時平の仰は天下の爲、御形代とはさる事なれども、若は彼僧相人にて、君臣の相を能く見るならば、王孫に有ぬ臣下としるべし。其時いかゞ仕らん」と、理窟に時平行當れば、三善の清貫進出、「菅丞相の詞共覺へず。彼坊主を相人とは餘りな先ぐり、念に念が入過る。左中辨希世殿、そふじやないか」と指出口。イヤ是念に念を入てさへ、過仕落は有ならひ、假初ならぬ唐土人、御對面の事なれば、輕々敷計はれずと、暫しが間御思案有、菅「所詮天子の御代、人臣は成がたし。幸御同腹の御弟宮齋世の親王を、今日一日の天子と仰ぎ、御姿畫を唐土迄傳へて恥ぬ御粧、此儀いかゞ」と理に叶ふ、詞に違ふ時平が工、目と目を三善の清貫も、口あんごりと明居たる。玉簾深き一間より、伊豫の内侍立出給ひ、「兩臣の御評、我君委

しく聞召れ、朕が代は齋世の宮と直々の勅諚にて、只今御衣を召替へ給ふ。此由申傳へよとの仰にて候」と内侍は奥に入給ふ。時平は俄にむつと顔、輝國が悅喜の眉、開く扉は日花門、玄蕃允が案内にて、渤海國の僧天蘭敬、倭朝にかはる衣の衫、庭に覆ひて畏る。「ム、唐土の僧天蘭敬とは汝よな。龍顔を寫し奉らんとの願ひ、叶ふは汝が身の大慶、有がたく存じ奉れ」と、時平が指圖に鼇蹕の、聲諸共に高々と、御簾卷上ぐる其内には、弟宮齋世の親王、金巾子の冠正し、御衣爽に見え給ふ。官人、あつと平伏敬へり。天蘭敬、漸〳〵頭を上、玉體をつく〴〵と拜し奉り、天「ハヽァ天晴聖主候や、我國の徽宗皇帝、慕はるゝも理なり。三十二相備はつて、いはん方なき御形、勿體なくも僕が筆に寫し奉らん」と、用意の畫絹硯箱、檜の木の燒筆さら〳〵と、眉のかゝり額際、見ては寫し書ては拜し、御笏の持せやう、御衣の召振違ひなく、即席書の速さ、顔輝が子孫か只ならぬ、畫筆の妙を顯はせり。判官代は差心得、捧物取納れば、「重ねて俸祿賜びてんぞ。旅館に歸れ」と道眞の、下知を請繼春藤玄蕃、御暇申させ、唐僧を伴ひてこそ退出す。歸るを待ちて時平大臣、玉座にかけ寄り、齋世の宮の髑攝んで引摺出し、御衣も冠もかなぐり〳〵、時「唐人が歸つたれば、暫も著せては置れぬ、九

衫―えり

金巾子の冠―巾子は髻を入るゝ所金巾子の冠は天子の常に召さるゝ冠金の紙を以て纏をはさむ

三十二相―佛陀の相

顔輝―元の畫工秋月をいふ

九位でも―九位は位階の最下

聊爾―粗忽

神道加持―神事の祈り

位でもない、無位無官に著せた裝束、此冠礒れた同然、内裏に置ず我が預かる。今日の次第は、右大臣奏聞せられよ。身は退出、罷歸る」と御衣冠、奪取て行んとす。道眞立て引取給ひ、菅「聊爾なり時平、勅もなき御衣冠、私に持歸り、過つて謀叛の名を取給ふや」と、何心なく身の爲を、いはるゝ身には胸に釘、頭ゆがめて閉口す。齋世の宮、菅丞相に向はせ給ひ、「天子序の勅定には、老少不定極りなし、何時しらぬ世の中に、名許殘すは其身の爲、道を殘すは末世の爲、妙を得たる筆の道、傳ふべき總領は、女子なれば是非に及ばず、幼ければ弟の、菅秀才にも傳ふまじ、弟子數多有菅丞相、器量を擇て筆道の、奥義を授長き世の、寶とせよとの御事」と、仰の中に左中辨、宮の前へずつと出「菅丞相の弟子の中、位といひ器用といひ、希世に上越す手書はなし。幸是にて傳授有と、御申付下さるべし」と云せも敢ず、菅丞相莞爾と打笑、菅「内裏に有る時は我傍輩、筆法は我弟子なれば、此道において師匠を差置、我儘の願致されな」と誡の詞、嚴々と襟を繕ひ、勅答には、「有がたき君の恵。我が筆法の大事には、神代の文字を傳ふる故、七日の齋、七座の幣、神道加持に唐倭、文字は何萬何千にも、我筆道に洩しはなし。それ共しらず爰かしこに、手習ふ子供も皆我弟子。今日より私宅に閉籠、擇出して器量の弟子に、筆傳授申べし」

御惱の祈願―天子御病氣平癒のいのり　加茂堤―鴨にかくせた―來た　短い癖―短氣なくせ　行いでな―行かぬか　蓼喰ふ虫云々―人には好きぶすきあるをいふ諺

と、宣ふ詞は今の世に、傳へて殘る筆道の、道は御名に顯はれて、眞成かな誠成、君が御代こそ　三重豐なれ。引捨る車は松に輪を休め、舍人一人は肘枕、二輛竝べし御所車、かたへは藤原かたへは菅原、道眞公の名代は左中辨希世、時平公の代參は三善の清貫、加茂明神へ御惱の祈願、神子が湯浴の其間、眠るむまさは加茂堤、夢に夢をや結ぶらん。松吹風に菅原の舍人、梅王丸目を覺し、「コリヤやい松王丸、そちが主の時平公は、短氣者でも根が大鳥、名代にわたせ清貫殿は、短いくせに根が惡者。呼使を請ぬ内、目を覺して行いでな」松「ホウ梅王のいはるゝ事はいの。こたなの主の名代に來た、希世殿こそ大邪人。蓼喰ふ虫も好々と、あの和郎を弟子にしたり、代參におこしたりなさるゝ、菅丞相の、お心がしりたい」梅「イヤそりや其方達が、小い了簡とは違ふ。聖人の胸の廣さは、此方等が身にも覺への有事。齋世の宮樣の車を挽、櫻丸とわれとおれと三人は、世に稀な三ツ子、顏と心はかはつても、著る物は三人一所、ひよんな者產んだ、と親父が氣の毒に思ふたをお聞なされ、三つ子は天下泰平の相、舍人にすれば天子の守と成、成人さして牛飼に差上げよ、と菅丞相樣のお執成で、御扶持迄下され、親四郎九郎殿は、今佐太村の御領分に、御寵愛の梅櫻松を預り、安樂に暮して居らるゝ。其御寵愛の三木の名を、我々

烏帽子親―元服する時冠を著せて貰ふ人

おはずかちずー懇、慣ず借らず子三人

いか様―成程

にお付なされ、おれを兄のお心でか、梅王丸とお呼なされて召使はる。其方は松王丸、櫻丸は宮の舍人、烏帽子親と云御恩の御方、家を隔てゝ奉公する共、必仇疎に思はぬがよいぞよ」松「ァヽくど〳〵〳〵と永談議説人。もふ齋世の宮もお參りなされ、牛休めに櫻丸も來そふなもの、何ぞ用が有るか」梅「ハテ佐太村の親父殿から、來月は七十の賀を祝ふ程に、三女夫連で來いと人おこされた、其事いはふと思ふて」松「ソリャ銘々に人が來て、よふ知つてゐる。思へば親父殿は、おはずからずに子三人と、果報な人では有るはいなァ」と、兄弟咄しの其中へ、同じ胤腹一時に、生れて年も同年、どれが兄共弟共、梅と松とに櫻丸、三幅對の車挽こかけに一輛引捨て、堤の上から、曳「是はく〳〵ふたりとも、ゆつくりとして居らるゝ。御神事も早半過、呼立られぬ中に行たらよかろ」と、眞顏でいへば梅王丸「御神事が濟だら、宮樣からお立て有ろが、其方や又爰へ何しにきた」曳「イヤ此方の宮樣は、神司の方で御休足有故、お立の程がしれぬ。此方衆の乘せて來た御名代の衆は、禁庭の御用が有迚、立騷いで居たぞや。油斷して呵られまい」と、いふに松王「いか樣、役なしの宮樣と、時平公のお目鑑で、御用繁き清貫樣とは違ふ。何時しれぬいざ行こ」と、車にかゝれば、梅「ヤレ待て松王、清貫樣がお立有ば、此梅王が

お供した、希世の卿も同然。萬一お立でない時は、あの大勢の群集の中へ、二輛の車を引かけて、怪我さしても損ねても、不調法は舍人の誤、一走往て樣子を見て、取に歸る迄の事。休んだかはりじや、サア來い」と引連立て兩人は、宮居の方へ走り行、跡見送りて櫻丸、「ハ、、、一ぱい食ふて往たは〳〵」と、獨言して相圖の手拍手、招けば招かれ戀草の、露踏分けて十五六、被の風の優しきは、菅丞相の御娘、刈屋姫迚色も香も、文は父御のお家柄、口說き落して宮樣に、逢せませんと跡に付、供は八重迚花めきし、櫻丸が自慢の女房、先へ廻りて、「コレこちのお人、首尾はよいか」と問へば點頭、櫻「よい共〳〵、今日此加茂堤はお車の休所、人どめして一人も通さぬ、鼠の子もない所と思ひ、宮樣をそびき出して來た所に、梅王や松王が、どんぐり目玉にほつと草臥、一生につかぬ嘘をまた吐いて、まんまと散らして仕廻た。姫君樣恥しそふな顏せず共、お出お出、ドリヤ開帳仕らふ」と、車の御簾を引上れば、齋世の宮は面憚けに、姫は猶しも顏見合せ、につと笑ふて袖覆ふ。櫻「サア爰らが下々と違ふて、飛付して輕業もさせにくゐ。女房共暗闇にしたいなァ」玄「何のいな、晝じや迚結構な車の內」櫻「エヽすばやい奴では有そ、我等は暫しお暇」と木陰へはいれば、玄「それ〳〵、こんな時には男は邪魔。サ

そびき出し—誘ひ出す

お姫様、申上たい事有ば、遠慮なしにおつしやれ」と、突き遣られて刈屋姫、「千束の文のお返事に、首尾あらばとのおん談、有がたいやら嬉しいやら、今日の此首尾待兼て、お呵受けに参りし」と、袂くはへて宣へば、齋世の宮も十七の、いとまだ若き初戀に、何と云寄品もなふ、齋「櫻丸がいかゐ世話、文見る度にいやまさり、逢たかつたに能ふこそ〳〵。嘸春風で寒かろ」と、仰は姫の身にこたへ、春風よりも戀風が、ぞつと身にしむ計なり。車のかげより櫻丸、ぬつと首出し、「コリヤ女房、我身抓つて人の痛さ、おりや先刻にから死脈が打、早ふ配剤仕おらぬか」とせり立てられて、女「ヲそれ〳〵、春風でお寒いとおつしやる、憚りながら御車を、暫しの内の風凌ぎ、御免有て」と姫君を無理に抱上げ押入れば、姫「アコレ、是は何しやる。勿體ない」と云つゝも、車の内へ入給へば、指心得て櫻丸、「さらば閉帳」と御簾おろす、内には宮の御聲にて、「嬉しいぞや」とのお詞と、姫「神詣の御車で、罰が當ろとシヤ儘よ」の睦言、聞て夫婦は飛退、櫻「女房共、たまらぬ〳〵、隣嚴しうて、ひよんな寶を設けた」と身もだえすれば、女「ヲこれ聞へるはいの、お二人共に御機嫌能、嬉しい事ではごんせんか」櫻「イヤもふ餘り御機嫌が能過て、近所迄難義がかゝつた。とはいふ物の、有様はそちが働き、よふマア尋逢たな」

配剤―逢ふ手段を廻らせ

隣嚴しうて云々―隣きびしうして寶儲けるといふ諺を轉用す

女「こなさんの敎への通、内裏上臈の形にやつし、社家の内へずつと行て、姫君のお傍へ通り、櫻丸が女房八重でござりまする、と申上たれば、あなたにも待兼てござつたかして、よふおじやつた、もういこか、と妙衆を待して置て、裏道から忍んでお出」櫻「チチ其筈々々。此中から手耦して、菅丞相樣の筆法傳授に、取籠つてござるを幸、お袋樣へ神參りと願はせ、お供の衆には口藥、水撒く樣に飯して置た。ヤ其水で思ひ出した。追付お手洗水が入ろぞよ」女「何云んすやら、あのおほこな御二人」櫻「甘いやつでは有。手洗は愚、お行水が入もしれぬ」女「そんならつい此川水を」櫻「ア、いや、コリヤ雨あがりで堤が濘る。怪我さしては晩からおれが不自由な。神前の水汲で來い」女「ソリヤマア如何やら勿躰ない」櫻「大事ない〳〵、王は十善神は九善、其王樣の弟御、九善かたしじや往て來い」と、せり立られて女房は、神前さして汲みに行、跡は氣休め一休と、思ふ所へ三善の淸貫、官人仕丁に十手持せ、裝束卷上げ欠來り、曹「ヤア夫におる櫻丸、儕最前齋世の宮を、奉幣も濟ぬ中連退いたとの風聞。何國へ供した、サア吐かせ」とせちがひかゝれば、櫻「存ぜぬ〳〵下として上の事。其方をとつくとお尋」と言はせも立ず、曹「ヤアぬかすまい。兼て儕が取持にて、物くさい事聞て居る。取分今日は、御惱平癒の神い

手耦―都合して
口藥―他言せぬ爲の賄賂
十善―前世で十惡を犯さぬ者今世にて天子になる
九善かたし―九善半
欠來る―駈來る
せちがひ―詰責する
下として云々―下として上の事計られぬ

神いさめ—神事

金輪際云々—決して

味をやる—しやちくさい事をする

さめ、其場所へ來て不淨が有と、親王でも東宮でも、急度捕へて罪に行ふ。有樣にぬかさずば、引とらへて拷問する。それ繩かけよ」と下知の下、おつ取卷くを身がまへし、櫻「知らぬといふたら金輪際、奈落の底から天辺知らぬ。聊爾召るとかたつぱし、下手のお鞠の蹴てく〳〵蹴踏、足の鹽梅見せふか」と、ぐつと踏出す兩足は、顏に似合ぬ古木なり。遣「シヤ下郎めが味をやる。最前から見る所が、車の内に人こそ有。御簾引斷り檢めよ」と、いふに隨ひ立寄る所を、首筋摑んで投退々々、櫻「車は舍人が預り物。命が有ば寄て見よ」と、蒐るを蹴飛し刎飛し、十手もぎ取かたつぱし、薙立てく〳〵追て行、其間に宮と姫君は、人に見られて叶はじ、と車の内より飛びおりく、さすが若氣の一筋に、遁れて旅のかり衣、何國共なく落給ふ。透間を見て淸貫が、取つてかへして車の内、引明見れば内は明穀、南無三寶、見違へた。舍人めが戻つたら、大抵では有まい、と下道さして逃る跡、間もなく欠來る櫻丸、御二方の見へぬに惱り、車を見れば宮の書置、「何何、見付られて辱めを請ふより、立退く」と有文章に、ハツト驚き胸は板、「イデ追付いて御供」と、欠行向ふへ女房八重、「サア是お手洗汲で來た」と、見せるを刎退、櫻「ナニ手洗所か、淸貫めが車の内、詮議せんと來りし故、見付られじと二方は、何國共無落

なされた」「ヤアそりやマア本か」と女房は、惚りぐわつたり水桶落し、女「シテまあ此方は、こりやどこへ」櫻「ヤア何處所か、元嫡君は菅家の御養子。實母は河内土師の里、菅丞相の御伯母君。先此方へ志し跡を慕ひ奉る。汝はあの御車を、宮の御所へ引て行。捨置ては後日の咎」女「成程そふじや。こな樣の姿に扮して引て行。ドレ白張」と請取て、「跡案じず共行しやんせ」櫻「ヲヽ合點」と白砂蹴立、飛が如くに欠り行。八重はやがて、夫の姿白張肩に引かけて、車の牛を引直し、させいほうせい精一ぱい、引共遲き牛の足、女「エどんくさい」と後から、おせば車もくるくゝと、廻る月日は不成就日か、お二人樣へ凶會日か　夫の爲には十方暮、鬼宿車を押かけて、天赦天一天上の、お首尾もよかれ神よし、と祈る心は八專の、黑日に間日の斑牛、追立てこそ　三重立歸る。上根と稽古と好と三つの中、好きこそ物の上手とは、藝能修行敎への金言、公務の暇明暮に、好せ給へる道眞公、堂上堂下はいふに及ばず、武家町人に至る迄、風儀をしたふ御門人、數も限もなき中に、左中辨平の希世、手習稽古ふる兄弟子、今度筆法御傳授は、指詰我等に極りし、と勝手覺へし御殿の眞中、朝の夜から机を直し、烟草よ茶よと呼立る、聲も屆かぬ奥勤。女中頭が聞咎め、局「コレお次に誰も居やらぬか。希世樣の御用が有」と、呼

白張―白布の狩衣
させい云々―牛曳くかけ聲
廻る―車、月日兩方にかゝる
不成就日―何も成就せぬ日
くる日―占方の惡き日
鬼宿車―廿八宿中の鬼星、嫁娶に忌む日
天赦天一云々―天赦日は大吉日天一天上も間日も吉日
八專云々―壬子の日より十二日間を云ふ其中四日を間日といふ
上根―たちのよい事

しゝちしん―ひつそりとして居る貌　鼻明す―へこます　傳授所―云々―傳授を受ける程度に達して居らぬ　ハッポ―ホイソリヤ

次局に不足顔、希「コレ手の皮がひりつく程たゝいてもしゝらしん。ムウ合點、顔出しせぬは毎日來るを面倒がり、言合せて鼻明かすのか。けふで七日此手習、おれが爲計じやない、御子息の菅秀才は年弱七つ、傳授所へ行かぬによつて、此希世が傳授して、菅秀才の成人以後、身共から又傳授。さすれば主の奉公も同じ事、ハッポというて廻はる筈。總じてこなたがなまぬるこい」局「コレ勝野よふ心得や。そなた衆の不調法、こける所は局が迷惑、何おつしやろとあい〳〵とナ。申希世樣、成程そふじや、よい了簡」希「毎日毎日氣を詰るも、菅原の家の爲、今日も又此淸書、お目にかけて」と指出す。局「イヤけふは御赦され」希「赦せとはなぜ〳〵」局「ハアテ幾度お目にかけましても、丞相樣の氣に入ぬは、お手の業ではござるまい。取次の仕樣の惡さ。手がはりにけふは勝野」希「イヤ是左樣はならぬ。筆法傳授も神道の祕密事。學問所の注連が目に見えぬか。油濃い女子はやられぬ。昨日迄は氣に入らずと、此淸書は格別、筆先に肉を持せ、天晴骨蹤を書得たれば、傳授はずる〳〵伸切つて、往てたもれ」と賴むに是非なく立つて行。希「コレ勝野、局のいはれた、あい〳〵を合點か」勝「アイ心得てをりまする」希「エヽ、忝い。幸傍に人もなし、福德の三年め、屏風のかげでついちよこ〳〵」と取手を振切、勝「エヽいや

氣に入らずと―氣に入らずともし

らしい。無體な事なさるゝと聲立てるが合點か」希「ヲヽ、合點じや。聲立てるが怖い迚、しかけた戀人叶へおれ」と、ほうど抱へて連て行。勝「アレ〳〵申」希「申とは誰に申」勝「アア御臺樣や若君樣、申し〳〵」といふ聲の、もれ聞へてや、菅丞相の御臺所、若君の御手を引立出給へば、希世は仰天、「是は〳〵悪い所へよふ御出」と、手持不沙汰も減らず口、希「勝野に癪の療治を賴まれ、取りにかゝつて斯の仕合せ。御臺にも御存のごとく、萬能に達せし某、世に希な器用者迚、希世と付たは親共が自慢の名。其例は此若君、年よりは御發明、菅秀才と呼び給ふも、秀はひいづる、才は才智の才を取て、菅家の公達菅秀才、あら〳〵謂斯のごとし。我等は餘り器用過、取損ふた按摩のしだら、御臺所の思召が」御臺「ア、其云譯に及びませぬ、日頃の行義知て居る。そんな疑何のいな」と、物に障らぬ御挨拶、希「ア、夫れ聞いて落付いた。今のしだらの次手ながら、お尋申事が有。御息女の刈屋姫齋世の君と、にやほやした世間の取沙汰。けふで七日相詰る、御所には何の沙汰もない。虚說かと存れば、刈屋姫の御殿は明家。御詮議もなされぬは親御達も合點の上、欠落でがなござるか」と、問はるゝ辛さは御臺所、暫し返事もなかりしが御臺「隱しても隱されぬ、さがなき人の口の端に、かゝるも是非なき刈屋姫齋世の君

減ちずロー強みをつくつて見せる

しだらーていたらく

は猶もつて大切なお身の上。互に忍ぶ戀路の車、廻り逢瀬もそこ〳〵に、事顯はれしを恥しく思召され、御所へお歸りなされぬ物と有て、常の御方ならねば、宮樣附々の人人が、夫なりけりにして置くまい。又此方の娘の事は、希世樣も知ての通り、本の母樣は河内國、土師村の覺壽樣迚、連合の爲には伯母御樣。嘗秀才を設ぬ先乞請て養子娘。此御所へは戻られず、伯母樣方へと心付、自が内證で尋に人を遣はした。此一落は今日が日迄、態父御へ知しませぬ。夫も何故勅諚にて、筆法傳授七日の中、參内止て取籠り、世の取沙汰は何にも知ず、傳授も過て聞給はど、嘸や惱り仕給はん、と彼方此方を思ひやる、心を推量してたべ」と、案じ給ふぞ理なる。内女關の奏者番、一間此方に畏り、「先年お館に相勤し武部源藏定胤、尋參れとの仰に寄、此間所々方々吟味致して、漸〳〵只今夫婦一所に參りたり。是へ通し申さんや」と窺へば、御臺所、「ヲヲ待兼ねし源藏夫婦。早々此處へ參れといへ。コレ嘗秀才、源藏に逢フ間、爰に居ては氣が盡けふ。勝野を奥へ連れて往て、機嫌能ふ遊ばつしやれ。希世樣にも暫しが間」希「ヲヲ此處に居て邪魔にならば、所替仕らん」と、續いて奥にぞ入りにける。人知れず思ひ初しが主親の、不興を請る種と成、夫婦が二世の契より、三世の御恩辨へぬ、不義より

一落―一件

氣が盡ふ―退屈せう

素浪人―するにかく尾羽打枯れし―やつれはてし

優曇花―三千年に一度花咲くといふ其開くと瑞の開くにかく

御所を追出され、さむい暮しを素浪人、尾羽打枯れし武部夫婦、今日のお召は心の優曇華、開く襖の内外迄、勝手は今に忘れねど、身の誤に氣おくれし、膝もわな〳〵窺足、御臺の御座を見るよりも、ハット畏れて飛踏り、蹲りたる計なり。御臺ヤア珍らしい源藏夫婦。連合の氣に背き、此御所を出やつたを、かぞへればもふ四年。日頃人を捨給はず、慈悲深い程きつさもきつい。思ひ切てはいかな事、見返らぬ夫のお心。叶はぬ事と思ひの外、源藏に參れと有御用の樣子、何かは知らぬが氣遣な事では有まい。定めて吉左右。ヤア自がいふ事計、嘸待兼ねてござるで有ろ。源藏夫婦が參りしと、誰そ奥へおしらせ申しや。サア二人共に顔も上、近ふ寄りや。ハアテ遠慮に及ばぬ、近ふ〳〵。年月の浪人住居、渡世が苦に成たか、昔の面影どこへやら、源藏が著て居やるは、荒々敷下々の著物。戸浪はそれに引かへて、小袖の縫箔、遉に女子の嗜か。二人の中に子も出來たか」と、問れて戸浪は有がた涙、「冥加至極もないお詞、主人のお目をくらませし、罰が當つて苦勞の世渡、夫婦が著替も一つ賣り、二つも三つも朝夕の、煙の代に成果し、漸〳〵殘せし此小袖は、御臺樣の下されし、御恩を忘れぬ賣殘、髪の餝の鼈甲も、いつかは檮の引櫛と、かはり果たる共拝。連合は布子の上、糊立ぬ麻上下も、けふ一ヶ日の損

おはもじ―お恥かし

栗―延えて伸す事

料借、ア、おはもじ。お上に御存ない事迄、身の恥顯はす錆刀、今日迄人手に渡さぬ武士の冥加」源「アイ女房が申上げます通、此態に成さがれば、一入昔の不義放埒、思ひ廻せば主人の罰、悔むに詮方なき仕合せ」と、夫婦諸共おろ〳〵涙。折から局は奥より立出、「お學問所へ召ますは源藏殿只一人、御用濟でお手の鳴迄、御臺様にもお出はならぬとの、仰られでござります」御臺「成程々々心得た。源藏は局と同道、戸浪はこちへ」と入給ふ。只今御前へ召出さるゝ、源藏が身の嬉しさ怖さ。局は斯と申上、立たる障子明渡せば、悲〳〵しく注連引縄、常にかはりし白木の机、欣然として座し給ふ、凡人ならざる御有様、畏れ敬ふ源藏が、五體の汗は布子を通し、肩衣絞る計なり。やゝ有て仰には、道「去がたき子細有て、汝が行衛を尋しに、住所さだかならず、漸〳〵きのふ在家を求め、今の對面滿足せり。其方儀は幼少より我膝元に奉公し、天性好いたる筆の道、好に上り習ふに覺へ、古き弟子共追拔、適手書になるべしと、思ひの外に主従の縁迄切て其風體、筆取る事も忘れつらん」と、仰に猶も恐れ入、源「御返答申は憚りながら、前髪立の時分より お傍近ふ召仕はれ、手を書く事は藝の司、書けよ習へと御意なされ、御奉公の間々〳〵書き覺へたと申も慮外、蚯蚓ののたくつた様に書手でも、藝は身を助けるとやら浪人の

業藝、鳴瀧村で子供を集め、手習指南仕り、今日迄夫婦が命毛、筆先に助られ、清書の直し字、毎日書け共上らぬ手跡、御尋に預かる程、身の不器用と御勘當、悔むに詮方なき仕合せ」と、歎くを倩聞し召、道子供に指南致すとは、賤しからざる世の營、筆の冥加藝の德。申所に僞りなくば手跡もかはらじ、改むるに及ばね共、爰にて書せ、道眞が所存は跡にて云聞さん。認め置たる眞字と假字、詩歌を手本に寫し見よ」と、白木の机御手づから差寄給へば、ハァはつと先へは出ず跡ずさり、志根惡の左巾辨物蔭よりずつと出、「コリヤ源藏、樣子殘らずあれから立聞、師匠の指圖は兎も角も、辭退申て出る筈が、兩手をついて目をましくし、蟇の所作がらするは、書ても見樣と思ふ氣か。それは篦太い叶はぬ事」源「ハァお馴染と有て忝い希世樣のお詞に、一ッも違はぬ役に立ず、併身の分際を顧ぬ、源藏めでもござりませぬ。只今是にて書と有、お手本書て能やら惡いやら、跡先の樣子も存ぜず、四年以來在所住居、くさ墨に三文筆、書出しや反古の裏に書ならば場打もせまい。其結構な机に墨筆、大廣檀紙の位に負け、一字一點いかな〳〵」希「ホホ好い了簡。いかぬと知て何故立ぬ」源「サア其處でござります。御勘當の私、御意にあまへた身の願ひ、お執なし賴上まする」希「ムウ夫で聞へた。詫言はしてやろが、今はな

志根惡―根性惡い
篦太い―大胆
場打―場所の立派なる爲に臨すること
大廣檀紙―みちのくに紙にて厚く柔かくしぼあり

らぬといふ其仔細、引つまんで咄して聞ふ。此度帝の仰には、存命不定の世の中、生死の道には老若差別はなけれ共、マア年寄から死ぬるが順道、菅丞相は當年五十二、天命を知るといふ齡も過、寄年を惜ませ給ひ、唐迄譽る菅原の一流、是迄傳授の弟子もなし、一代限で絶すは殘念、手を選んで傳授せいと勅諚で、七日の齋、殊の外お取込。事濟んでから願ふてやろ」頭「ハア樣子段々承れば、御大慶な勅諚」垂「サア其勅諚も大慶も、知れた事云はずとも、早々歸れ」とせり立る。道「イヤ立な源藏。云付た手本只今書け」と、仰は武部が身の大慶。希世は偏執むしやくしや腹、立寄源藏睨付、垂「わりや兄弟子に遠慮もせず、書ふと思ふて出しやばるか」頭「ホヽお笑ひ有ても恥しからず、御免なれ」と机にかゝり、手本を取て押戴き、心臆せず摺墨の、色も匂も薫しき、筆の冥加ぞ有がたき。希世傍へすり寄つて、「わが樣な横著者は、手本の上を透寫し。其手目は身がさせぬ。恥と天窓はかき次第、身のざまの恥頼、わりや何共思はぬか。溫袍の上に汚袴、机に直つて居るざまは、貧乏寺の講中奉加場の帳付に其儘。無緣法界を書なよ」と、惡口たらゞ〳〵云ちらし、怪我のふりにて机を動し、肘に障つて邪魔するも、構はず咎めず手本の詩歌、心よく書課せ、机も俱に御前に直し、蹈て頭をさけ居たる。丞相清書を取

上給ひ、『鑽沙草只三分計。跨樹霞纔半段餘。』是は我作れる詩。『きのふこそ年は暮しか春霞春日の山に早立ちにけり』是は又人丸の詠歌、いづれも早春の心を詠叶へり。假名といひ眞字といひ、是に勝れし筆や有ん。出かしたり〳〵。慾じて筆の傳授といつぱ、永字八法筆格の十六點、名をそれ〳〵にいふに及ばず、人々のしる所。菅原の一流は心を傳る神道口傳。七日も滿つる今日只今、神慮にも叶ひし源藏」と、御悦は限なし。源「ハア有がたや忝い。筆法御傳授有からは、御勘當も赦され、前にかはらぬ御主人樣」道「ヤア主人とは誰を主人。傳授は傳授勘當は勘當、格別の沙汰なれば、不屈成汝なれ共、能書なれば捨置れず、私の意趣は意趣、筆は筆の道を立る、道眞が心の潔白、叡聞に達しても依估とは思し召れまい。希世にも疑はれな。勘當は前のごとく、主でなし家來でなし。此以後對面叶はじ」と、尖き御聲源藏が、肝に燒鐵さゝるゝ心地、源「道理を分ての御意なれ共、傳授は外へ遊ばされ、勘當御免」と泣きわぶる。希「こりや源藏が歎くは道理。勘當を赦されねば、傳授しても規模がない。彼が願も希世が望も立やうの了簡は、傳授と勘當かへ〳〵にして遣はされたら、よさそふな物のやうに存じまする」といふ折から、當番の諸大夫罷出、「俄の御用これ有間、只今參内遊ばされよ、と瀧口の官

鑽沙草云々―早春にて草もまだ伸びず霞も多くたゝず（和漢朗詠集）
きのふこそ云々―年が暮たは昨日と思ふに早、春日山に霞が立つた（同書）

規模―手柄（俚言集覽）
傳授と勘當云々―傳授を希世に勘當を當源藏かへ〳〵て許されよ

人參られし」と申上ぐれば御不審顔、道「七日の齋過ぎざる中、御用とは何事。隨身仕丁の用意せよ」と、裝束の間に入給ふ。參内と聞し召、立出給ふ御臺所、襠の下に戸浪を押隱し、人目包も餘所ながら、お顔をせめて拜ません、と心づかひは希世が手前、「傳授の樣子承れば、お前には殘り多からふ、仕合は源藏。さりながら御勘當は赦りぬけな。館の出入も今日限、かなたこなたを思ひやり、御參内を見送りがてら、夫で〳〵」と襠の下をしらする御目づかひ、夫婦は重々お情の、身にしみ渡る忝涙。束帶氣高き菅丞相、一間の内より立出で給ひ、神道祕文の傳授の一卷、源藏に給はりける。當座の面目、御流儀末世に傳へる、寺子屋の敬ひ申奉る、因緣斯とぞ知られける。道サア傳授濟むからは對面是迄。罷歸れ立てよ〳〵」と頻の御諚、「コリヤ源藏、吼頬かいても最叶はぬ。腰が拔て得立たずば、引ずり出さん」と立寄る希世、御臺「なうあらけなく仕給ふな。三世の緣の切目じや物、立ぬも理り歎くも道理。涙とどめて御暇乞、見奉れ」と襠の、裙より覗かす戸浪が顔、それぞと推し給へ共、しらす顔にて立出で給ふ。何としてかは召されたる、御冠のおのづから落るを御手に請とめ給ひ、道「物にも障らず脫たるは、ハアはつ」と計に御氣がかり、「イヤ夫は源藏が願ひ叶はず落涙致す、落は落ると讀なれば、

東帶―文官の大禮服

御勘當―是上り源藏にかくる詞
あんじりと―とつくりと
きんかち―手前勝手

其驗でがな。イヤ〳〵左にてはよも有じ、參内の後知る事。源藏早く歸されよ」と、冠正しく參内有。希世はこは〳〵御見送。御勘當の身の悲しさは、行に行れず延上り、見やり見送る御後影、御簾にさへられ衝立の、邪魔になるのも天罰、と五體を投伏し男泣。戸浪が悔みは夫の百倍、旦「こなたは御前のお詞かゝり、直にお顏を見さしやつた。私は漸〳〵御臺樣の後に隱れてあんじりと、お顏も拜まぬ女房の心、思ひやつても下されぬ、まんがちな一人泣。同じ科でもこなたは仕合。女子は罪が深いといふ、如何した謂でなぜ深い。鈍な女子に生れし」と、御臺のお傍も憚かりなく、果しなみだぞいぢらしゝ。希世のさ〳〵立戻り、「ヤア源藏を歸されぬは、御臺所御油斷々々々。一刻も早くほいまくれ、と重ねて仰付けられた。そこを少身が了簡、其かはりには傳授の卷物、讀で見る望はない、筆の冥加にあやかる爲、ちよと戴かしてくれんか」と、望むに是非なく懷より、取出すを引たくり、逸足出して逃行を、「どつこいやらぬ」と源藏が、ほつ蒐けほつ詰襟髮掴み、引ずり戻してかづき投、大の男に一泡吹かせ、傳授の一卷取返し、「是をおのれが引かけふで直垂の羽繕。晝鳶の兀頂め、びく共せば打殺す」と、刀四五寸拔かくる。御臺「コリヤ源藏聊爾すな。戸浪過ちさするな」と、お詞かゝれば、源「エ

大げなし—負ふにかく
背負—祀を負ふにかく
長汐—流すにかく
見るめ—海松にかく
使の廳—檢非違使廳にて今の警視廳にあたる

エヱヽおのれヱヽヱ僻をな、只助るも殘念なな。寺子屋が折檻の机は、こいつが責道具。女房爰へ」と取より早く、脊中に机大げなし、兩手を引ぱる机の足、裝束の紐引しごき　雁字絡に括り付、「盜ひろいだ師匠の躾、竹笹のかはり扇の親骨、頬に見せしめひりつかせん」と、打立々々突飛せば、痛さも無念も命のかはり、恥を脊負うて歸りける。源藏夫婦手をつかへ、「禁裏の樣子承はり、歸りたく存ずれ共、長居は恐御臺樣、此上ながら夫婦が事、お捨なされて下さりますな」御臺「ヲヽ夫は心得たが、今行といふを聞捨に、せめて一夜といはれもせぬ。命が物種緣も盡ずば又逢はふ。モウ行きやるか」「アイアイ參りませねば成ませぬでござります」と、戸浪が涙長汐に、かはく間もなき袖の海、見るめいぢらし夫婦が姿、泣々御門を三重出て行源藏と引違へ歸る梅王、靑息吐息門の臺木に足躓き、かつぱと轉て起る間も「待れぬ〳〵待衆、御大事が發つてきた。科の樣子は何かは知らず、使の廳の官人共、丞相樣を取廻し、鐵棒破竹アレ〳〵爰へ。御臺樣へ此樣子を」と、館の騷動門外には、鐵棒打ふり警固の役人、輿にも召させ奉らず、宮丞相の前後をかこみ、先に進むは時平が方人三善の淸貫、門外に立はだかり、「齋世親王刈屋姫、加茂堤より行衞知れず。子細御詮議なされし所、親王を位に卽、娘を

あげ一断り

后に立んとする菅丞相が兼ての工み。其罪遠島に相極り、流罪の場所は追ての沙汰、夫迄は押込置、出口々々に大貫鑓、門の警固は身が家來、荒島主税を付置」と、呼はる。聲を聞くつらさ、御臺は警固の人目も恥ず走り寄つて「道眞公、コハそもいか成御事ぞや。齋の間の事、姫が身の上御存ない、云譯は何故なされぬ。科もない身を左迂との、仰は聞へぬ恨めしや」と歎き給へば、道「ハア愚々。道眞虚命蒙むれ共、君を恨奉らず。漸齒傾きし臣が拙き筆跡迄、惜ませ給ふ傳授の勅諚。きのふ迄は叡慮に叶ひ、けふは逆鱗蒙る共、皆天命のなす所。先程冠の落たるは、殿上の札を削られ、無位無官の身と成しらせ　今さら悔むは愚々。是より配所へ行にも有ず、見苦しく。歎かれな」と御臺を遠ざけ給ひける。希世は道より取てかへし、希「清貫殿御苦勞千萬、此和郎の樣子承はり、弟子の方から師匠をあげ、向後頼むは時平公。菅丞相と一つでない執成宜しく頼入」道「氣づかひ有れな、呑込んだ。作法の通り菅丞相、内へ追込み門を打て」「畏つた」と荒島主税、割竹振上立かゝる。「コレ待つた。其役目希世が替つて仕る」と割竹請取、「コレ謀叛人殿、今迄とは當りが違ふ。時平公へ宗旨を替た手見せの働。割竹一つ」と振上ぐれば血氣の梅王ずつと寄、希世を四五間突飛す。希「ヤア下主の慮外者、自滅仕

腸がよれ返る―可笑さにたへず

たふて出しやばつたな」梅「ハレヤレしれて有下主呼はり。こなたの口から虚外とは腸がよれ返る。其割竹振上げて、誰を〳〵」垂「ヲヽ、サ謀叛人の此わちよを」梅「ヤア謀叛とは誰を謀叛。御恩を忘れし人非人、菅丞相にはお構ひなくと、儕に罰は身が當る」と、又飛びかゝる梅王丸、御手を指延引寄給ひ、道「ヤア小ざかしい汝が擧動。勅諚に寄て斯成道眞。希世は扨置、其外へも手向ひするは上への恐。汝は勿論館の者共、我詞を用ひずば、七生迄の勘當ぞ」と、聞て希世がこはげも拔、「コリヤ梅王、して見ぬかい。顯げた計の腕なしめ」と、のさばる無念忍へる梅王、是非も情も荒島主税、官人原に追立られ、すご〳〵館に入給ふ、御有樣こそ勞はしき。サア〳〵用意の大貫鎚、表と裏へ手分の人數、築地の穴門樋の口迄、暫時の間に打付しは、物忌はしく見えにけり。清貫見廻し、「ハレ能氣味。出口々々の締も能いか、築地の屋根も越ふも知れぬ。主税萬端油斷すな。暮に及べば希世殿、いざ歸らん」と打連れて、六七間も打過る。築地のかげに待居たる、武部源藏ぬつと出、希世を一當悶絶させ、周章清貫相伴投「スハ狼藉者打のめせ。殺せ縛れ」とひしめいたり。武部は戸浪に指添渡し、寄らは切んづ勢ひなり。希世は漸〳〵人心地、立上つて、「ヤアうぬは源藏め。一度ならず二度ならず、ひどいめに

梅王丸―此下に「そ」字を入れて見るべし

顯げた計―口計り荒帚―あちずにかく

打のめせ―打倒せ

調てもー原本調けもさいをまずーいためず

心の早咲ー心の早るにかく大事の云々ー源藏の詞心得高きー梅王の詞心得たにかく

合したな。うぬがする狼藉、菅相丞がさしたに成て、流罪の仕置が死罪になろ」と、いはせも果ず高笑、源「女房アレ聞。物覺のない拔作殿。傳授は請ても勘當赦ぬ、此源藏には主人がない。梅王は主持で、儕めをさいなまず、悚へて居るかはいさに、名代に投てこました。名代次手に皆撫切」と、女房諸共拔放し、めつたなぐりの太刀風に、小糠侍鋸屑公家、吹立られて散失けり。敵なければ立歸る、時節も幸黃昏時、門の扉をとん〳〵とん、扣けば内より咎める聲、「聞覺へた梅王か」梅「さいふは武部源藏殿か」源「殿所かい若い者、油斷して居る所でない」梅「扉の釘付踏破り、御主人達の御供し、此場を退は安けれど　おことが今も聞く通り、仁義を守る道眞公」源「とあつて讒者が計ひにて、お家の斷絶覺束なし。御幼少の御若君、夫婦が預り奉らん、所存を立るはコレ梅王、若君をこつそりと、築地の上から」梅「できた〳〵源藏殿。お上へいつては得心有まい。盜出すがお家の爲」源「そふぢや〳〵能了簡。一刻一歩も早退たし。賴む〳〵」といふ間もなく、築地の上から、梅王が心の早咲、勝色見せたる花の容顏、大事の若君怪我さしますまい。心得高き築地の屋根、延上つても屆かぬ背たけ、とやせん戸浪を抱上れば、軒に手屆く心もとゞく、若君請取抱おろし、外と内とに忠臣二人、胸は開けどひらかぬ御門、荒島

主税目早く見付、「ヤア盗人の隙は有ど、守人の隙がない。宵覗めを手引する、内と外との相盗めら、菅秀才を盗んだ。此旨注進せん」と、かけ出す先に源蔵が立ふさがつて、「どこへ〳〵、儕をやつてよい物か」と、討てかゝれば抜合せ、切結び切ほどき、追つ返しつ二人が勝負、屋根の上から見て居る梅王、棧敷正面眞向二つ、われて命は荒島主税、とどめに及ばぬ切捨々々、危い場所を盗人夫婦、行末榮ゆる菅秀才、梅「若君頼む夫婦の衆」源「館の父君母君を、頼むぞ梅王」梅「心得た」と、互に頼み頼まるゝ、忠義々々を書傳ゆる、筆の傳授は寺子屋が、一藝一能名も高き、人の手本と成にけり。

其二

道行詞の甘替

「サア〳〵子供衆、買たり〳〵。飴の鳥ぢや飴の鳥。夫がいやならしる飴鑿切、泣子の口へは地黄煎玉。扨其外平野飴、桂の里には桂飴、西の宮には飴の金、其品々は往て買たり。拙者が自慢で賣弘める、櫻飴買つしやい。櫻飴々々」櫻々と己が名を、いへども包む頬かぶり、木綿頭巾に袖なしの、羽織は輕き身なれ共、忠義は重き牛飼の、櫻丸は

しる飴―水飴の事又地黄煎とも書く江戸では下りといふ（物類稱呼）

菅原―するにかく　土師を―恥にかく　石清水―いはんにかく　とめ木―着物にたきしめる匂羽摺て云々―蝶の羽に着きたる粉を白粉に見立てたる也

いつぞやより、加茂の川浪立出し、齋世の宮と姫君に、漸〳〵と廻り逢、一日二日は我家にも、忍ぶに何と菅原の、伯母君頼み參らせん、と行は車の供ならで、跡と先とに打荷ふ、飴の荷箱のかた〳〵に、御二方を入參らせ、浮世を土師の里へとて、飴のとり〴〵賣て行、こゝろづかひぞせつなけれ。都をば夜を深草に、出ても道はあやなくて、御香の宮に明渡る、道を芹川淀も越え、町を過れば爰ぞよし、誰かは何と石清水、サア〳〵お出と荷をおろし、箱をひらけばうづ高き、姿あらはに刈屋姫、暫らく拜む日の影に、目なれぬ山や知らぬ里、姫「思ひなくてぞ見まほしよ。なふ宮樣」と有ければ、齋「さればとよ、そなたの父菅丞相、如何なる事の誤にや、押籠の身と成けるも、我々出し跡なる故、正しくはしらね共、やがて赦され有ぬべし。兎にも角にも、我が身は今賣る飴の如くにて、傘に覆へる日蔭の身、いつかとけなん心ぞ」と、御仰に櫻丸、「左樣にては候はず、御忍ましますも、飴をば上に君を下、取も直さずあめが下、しろしめす瑞相にて候」と、申上ぐるに宮は猶、「勿體なし」と身をすべる。野路の畔道そろ〳〵と、蕨が裾に手を入て、裾ひるがへす裏模樣、とめ木に草も劣しき、春の野面に群る蝶、袖にとまらば羽摺て、鏡絶せしけはひせん。爰に我名をかりやの里、今苗代の時を得て、民の手業も遠目

には、ことめづらかに引鶴の、聲に千歳もかはらじと、契りし今の閨の内、宵よりしめて寢る夜さは、月は出るやら曇るやら、歌枕とる手に寐て解帶の、いかるお世話く、枕とる手に寢てとく帶の、いかるお世話く。結ばぬ夢を覺せとや　春の風ぬるみし空の快く　行手の森の人音に、見付られじと手ばしかく、又忍ばする飴賣が、片手に太鼓片手に撥、聲おかしくも拍子どり、三下り拍子「こんりやこんりやくくく。是は天子の始めなされた神武飴迚、神武天皇は飴がお好で、練らしやりましたる名物飴をば、こちも仕なろて嘸等や嫁等が、紅絹の襁をしんどろもんどろかけて、しんどろり　もんどろりと練りやりましたを、買をなら今ぢやくく」と賣聲の、子供あつめに子の親が、紬の土産を買に來て、認める間の取沙汰に、「惜や都の菅丞相　筑紫へ流され給ふ故、津の國安井に風待して、おはしまするばいたはし」と、所縁としらず告て行、跡の驚き悲しみは、箱を細目に顔計、齊「何道眞は左迂とや」姫「父上安井にましますとや。せめてお顔が拜みたい。何卒お船の出ぬ先に、逢はせてたも櫻丸。賴むく」もしどろにて、わつと計に泣給ふ、聲をも人にしらせじと、喇叭の笛に紛らして、夫より道を横切に、一荷の涙擔ひ行、先は何國ぞ津の國の、安井の岸の安からぬ、思ひ重ぬる　三重哀れさよ。世につれて、海の

しんどろ云々―しどろもどろにて甚だしく亂れるさま

認める間―櫻丸が飴を調へて渡す間

法皇―宇多上皇
院の廳―上皇の政を聞召す所
籠輿―牢輿

面も風さはぐ、湊に御船とどめしは、菅原の道眞公、終には讒者の舌強く、覺なき身に罪極り、筑紫宰府へ流罪の籠船、津の國安井に著しかば、警固の武士は、法皇の舊臣院の廳判官代輝國、逢坂增井に陣幕打せ、見るめ嚴しき鎧長刀、數多の官人四方を圍ひ、出船を松の下かげに、日和見合せ居たりける。判官代輝國海の面を見渡し、幕絞らせて、丞相のおはします籠輿の下に手をつかへ、「沖の樣子を窺ふ所に、五三日も御出船の日和共、相見へ申さず。此所に御逗留有ふより、河内の國土師の里へお越有て、伯母君覺壽公共、御暇乞候へかし」と、申上ぐれば菅丞相、面やつれたる御顏ばせ、物見より顯はし給ひ、「院の御所に使はるれば、上を學ぶ下々迄情有武士よ。斯く囚と成し身を、赦し送らば我よりも、おことが罪はいかにせん。思ひ寄ず」と宣へば、輝「コハ有がたき御仁心。左程尊き御方の、お爲に成て咎めにあはゞ、死後の面目子孫の譽。殊に私、わざならず、法皇兼ての仰には、土師の里に伯母有と聞及ぶ、若津の國にて汐待の隙あらば暇乞させよ、と密々の御仰、何憚る事もなし。御心置なく土師の里へ御出」と、すゝめ申せば菅丞相、都の方を打ながめさせ給ひ、「世に有がたき法皇の御心や。天子に父母なしといへ共、現在の御父君。其御力に及ばずして、斯く囚と成事は、如何成罪の報ひぞや。はかなの浮

世や、淺ましの身の果や」と、三世を悟る御身にも、世をつらしとの御述懷、哀れにも又いたはしょ。日和見の船頭罷出、「今朝の天氣合、まだ二三日も御逗留と存ぜしに、思の外立直り、風治り候へば、御出船の御用意」といふより輝國、「ヤアだまりをろ。立直るまじき日和、立直つたとぬかすからは、よき日和の悪しく成も、儕が眼にかょるまい」船「イエ〳〵左樣ぢや御座りませぬ。二八月は船頭の倚時、得ては手の裏かへします」輝「ソレまだ吐かす。左樣な手の裏かへす日和に、大切な流人の船出さるょ物か」船「イエサ是は慥に」輝「ヤア狼狽者、向ふ山に雲がかょつて、まだ四五日も御出船の日和はない。いらざる儕が奉公ぶり」と、呵り付れば惱りし、「いかな巧者な船頭でも、此暴風には仕樣がない」と、つぶやき〳〵入にける。菅丞相は輝國が志、法皇の御心の有がたさに、河内の國へ赴んと、仰ゆたかに安々と、御輿とどまる所迚、井の字を居と書かへて、安居の宮と末の世に、仰ぐも神の威德かや　かょる折から櫻丸、宮姫君を御供申、先に進んで馳來り、「菅丞相流罪と承はり、緣類の者暇乞の願、又一つには科の樣子も承はりたし。御役人へ直談」と、立寄を數多の官人「ヤア直談とは慮外者」「暇乞とは無法者」「油斷ならず」と取卷を、夫と悟りて輝國、「ヤレ聊爾すな」と押しづめ、「科の樣子聞

得ては云々―手の裏をかへす樣に天氣のかはる事珍らしかちず

暴風―輝國の烈しき勢

たくば、いふて聞さふ。上より咎めの條々、具に云開き給へ共、齋世の宮と刈屋姫、密通の言譯御存なき迚あかり立ず、是非なく科に落給ふ」と、聞て悲しく刈屋姫、宮諸共にかけ出給ひ、齋「何我々故囚れとや。情なや淺ましや。不義は二人が誤りぞ、流しなり共切成共、罪に行ひ丞相を助け得させよ」姫「父上に逢はせてたべ助けてたべ」齋「對面させよ」と二方は泣さけび給ふにぞ、輝國遙に頭をさげ、「恐れながら御對面有ては、彌〳〵丞相の罪重く成道理。元此おこりは、去頃君天子に成かはり、御姿を唐僧に寫させしは、菅丞相の計ひ、唐土迄天子と思はせ、我娘を后に立、外戚とならん下工、と讒者の舌にかゝる内、宮姫を連御出奔、彌〳〵それと叡聞に達し、罪なくして罪に沈む、殊に姫君とは親子の中、是天子への恐れ有ば、よもや對面候まじ。兎角此上菅丞相の爲を思召さば、是より刈屋姫と御緣を切れ、二度禁庭へお歸り有て、謀叛なき趣きを仰わけられ、丞相歸洛を御願ひ候へかし」と、申上ぐれば齋世の宮、「我故罪に沈むも悲し、又我をのみ戀慕ひ、付添來たる契をば、見捨てゝ何と往なれうぞ」と卿ち給へば、姫は猶更、「父の爲には怨敵、我を罪して御流罪を、赦してたべ人々」と、伏沈み〳〵、消え入計に泣給へば、媒したる身に取て、辛さ苦しさ櫻丸、骨にも身にもしみ渡り、思へば〳〵我なくば、此戀

誰か取持たん、科人は外ならず、と悔めど今更詮方も、涙先立つばかりにて、とかふ詞もなかりしが、立直つて宮のお傍に恐れ入、「私元は土百姓の世忰。御扶持を下され、君の舍人を勤るも、皆菅丞相様のおかげ。其恩有方を流罪させ、のめ〳〵見ては居られず。と申てから、我々風情の及ばぬ所。輝國殿の仰のごとく、是より姫君と御縁をお切なされ、他人と成てお願ひ有ば　よもや叶はぬ事もござりますまい。再び丞相様御歸洛有て後、表向の御縁結び。暫しの間のお別、御聞入下されよ」と、身にかゝつたるせつなさに、土に平伏し願ふにぞ、齋世の宮は猶涙、「一旦館を出し身の、面恥かし二度の恥」と、仰に輝國詞を返し、「御館へこそお歸りなく共、法皇の御所へお越あらば、猶以て御願の能便り。ひらに是非に」と勸むるにぞ、兎角涙にくれながら、姫君に指向ひ、齋「我戀草の思に迷ひ、丞相の歸洛を願はずば、天道怒り給ふべし。契は盡ずかはらね共、親の爲と諦めて、別れてたも刈屋姫」と、涙と俱に宣へば、姫「コハ勿體ない。お歎をかけるも元は自ゆへ。いつそ焦れて死んだらば、今の思は有まいに、お名殘惜や」と御顔を、見るも涙見らるゝも、涙片手に、齋「又逢ふ迄は隨分まめで」姫「おまへ樣にも御機嫌で」と、跡は涙のすがり泣、わつと絶入給ひける。かゝる折節いづれ共しらぬ、女中の乘物

つらせ、おめず臆せず判官代に指向ひ、「私事は土師の里立田と申て、菅丞相の伯母の娘」と、聞に嬉しき刈屋姫、「コレ姉様ナフ立田様かいの」と、取付給ふを突退け刎退け、「母の覺壽、左迂の様子を聞及び、年寄ての悲しみ、御推量下さりませ」と、いふ内に又姫は取付、「其お歎が身に取て、猶悲しい」と歎くを振り切、「何卒此所の汐待を、土師の里にて御一宿あらば、心よく暇乞も致し度願。あすをもしらぬ老の身の、少しは歎きもとどめたく、無體な御訴訟。夫宿禰太郎が參る筈なれ共、郡役も勤る身で、身勝手な事申も如何、女の慮外は常の事、と不調法も願ずお願ひに參りし。お役人の御了簡、偏に頼み上ます」と、願へば輝國、「イヤ一家の願ひ叶はぬ事。大切な囚人、浪打際の一宿心元なく、只今用心の爲、土師の里へ立越る。一宿は覺壽の元」と、聞て嬉しく、「ヱヽ夫はマア結構な御用心」と、悅びいさむ立田が袖、姫はひかへて、「コレ申迚もの事に、父上にお目にかゝるお願ひ」と、頼む袂を振り放し、「恐れ多い丞相様へ、何の顏さげて逢ふと思召ぞ。元あなたに菅秀才といふお子のない先、母様がお前をば藁の上より遣はされ、私が爲に妹でも、今は菅原の姫君様。勿體ない宮様へ戀仕かけて、今此大事になつたでないか　戀は心の外でもな、是はあんまり外過て、姉のわし迄人々へ　顏が出されぬ恥

曹輩―姉妹態と―原本と字なし

立田殿は云々―姫を立田の家へ連れずに覺壽の所へ預け上となり

もふきの別―不詳

赤井の水―血の涙に通はす水のあはれ―水の泡にかく

かし」と、叱る心も曹輩の遣よしみと知れける。輿の内には菅丞相態と詞をかけ給はず、事を量るは判官代、「ヤア立田殿、今更御異見益なき事。コリヤやい櫻丸、何をうつかり。一時も早く宮を法皇の御所へ御供申せ。立田殿は刈屋姫を、御同道は必無用ナ合點か。コレサ土師の里の親元へ、急度お預けなされよ」と、表を立て心は情、立田が持せし乘物へ、菅丞相を召かへさせ、跡と先とは警固でかため、御乘物はゆるやかに、常の旅行同然に、輝國が引添て、土師の里へと急ぎ行。「ナフ是父上」宮「丞相」と宮諸共に欠行給ふを、櫻丸が引とめ、立田が押へて引わくる、名殘盡せぬ妹脊の別、おふきの別と遺又、姉が情で引合す、いとど思は增井の濱、目は泣き腫らす赤井の水、いつか安居と逢坂の、水のあはれや泣別、さらばさらばと三重聲殘る。菅丞相の御別、對面有たきの覺壽の願、流人預かる判官代輝國の用捨を以て、河内の屋敷へ入給へば、老の悅大方ならず、馳走の役人夜晝の、わかちもしらぬ鬧しさ。立田の前は船場にて、思はず逢たる刈屋姫、密に伴ひ歸れども、家來も多くはしらぬがち、隱し置たる小座敷の、襖をそつと押ひらき、立「嘸淋しからふ、精も盡ふ。顏見に來たいは山々なれど、去迚は何や角や、用事の多さ、母樣の傍放されねばえ參らぬ。今が能透、誰も來ぬ氣晴しにサア爰へ」と、心

刈屋姫―借るにかく
今の母云々―御寮所と菅秀才
かんまへて―構へて、必
口むしり―氣をひいて見たれば
時氣―暴風
八ツ―午前二時

づかひも曹輩の、姉の情を刈屋姫、一間を出る目は涙。刈「齋世様に別れてより、段々御世話に預かる上、父上様にもお目にかゝり、せめて不孝の申譯、夫も叶はぬ物ならばと、我身の覺悟極めても、產の母様、覺壽様、今の母様都の弟、親王様の御事は、猶しも忘れぬ得忘れぬ、心を推量してたべ」と、歎けば共に涙ぐみ、立「悲しいは道理々々。去ながら、丞相様に逢ぬ迄、短氣な事などかんまへて、思ひ出しても下さんすな。母様のお願ひ立て、此屋敷に御逗留、どふぞ首尾を見繕ひ、母様のお耳へ入、お指圖請てと、餘所ながら、口むしりかけて見たればな、こちの思ふた坪へはいかず、母様の堅くろしさ、お果なされた郡領様に、少しもかはらぬ行義作法。我產だ子でも人にやれば、先こそ親なれこちは他人、それを親ぢやの娘ぢやと、思ふは町人百姓の、譯をば知らぬ子にあまさと、幸先惡い訴訟もならず、外の事に言紛らし、其場は濟でも始終が濟まぬ。お宿申も今日で三日、時氣空も吹晴れて下り日和に直つたと、船場から注進故、今宵八つがお立迚、輝國殿の旅宿より、知らせに寄てお立の用意。今やなんどと思ひの外、手詰に成たが、どふして好からふ。膝共談合、コレ泣ずと、好い智恵出して下さんせ」と、とつつ置つの胸算用、後にすつくと宿禰太郎、「よい分別者是に有」立「ヤア太郎様いつの間

に」太「ムヽ何時の間にとはコレ立田、連添男の目をぬいて、こつそりと取込で、だいそれた身の上哉。刈屋姫はそなたが妹、藁の上から養子の子細、知ては居れど京と河内、武家と公家とは位も格別、菅丞相の伯母風吹し、聟めかしても、いつかなめかれぬ位負、名計聞て逢たは今。てんと御器量、齋世とやら樣とやらが、現樣にならしやつたも道理じや〳〵。姫の顏見ぬ先は、おれが楊貴妃じやと思ふたが、競べて見れば無楊貴妃、そなたの名もかへねばならぬ」太「ソリヤ又何とへ」太「ハテしれたお次の前」立「ヱヽずはずはと出放題。母樣へも隱してゐる此譯、何共云しやんすな」太「それは氣遣仕給ふべからず。明日のお立しらされし、輝國の旅宿へ參り、此間御逗留、心づかひの一禮申、いよ〳〵刻限相違なく、一番鳥の鳴のが相圖、申合せに往て來いと覺壽の云ひ付。只今參る道で、よい思案が出たら、コレ戻つていはふお次の前」立「アレまたじやら〳〵轉業口」太「チツト閉口いてこふ」と、表の方へ出て行。後を見やりて刈屋姫「彼方がお前のお連合。身の上の事に取紛れ、御挨拶も得申さぬ」立「アヽこれ挨拶はいつでも成事、こちの願ひは延されぬ。アヽどふがな」と案じ煩ひ、「ヲヽそれ〳〵、所詮母樣にいふた迚、埒の明ぬはしれて有。連合も留守、母樣もお傍にござらぬ折柄なれば、お前を私が連て往

伯母風吹し—伯母の威を假るめかれぬ—聟めかれぬ、聟ちしき待過をうけちれぬてんと云々—たまちぬ器量よし

轉業口—冗談口

て、呵られふがどふならふが、跡は儘いな。サアこなたへ」と、姫の手を取後より、「不孝者どつちへ行」と、襖ぐはらりと母の覺壽、杖ふり上て飛かゝるを、立田ははつと抱きとめ、「お前に明ていはなんだ、隱したお腹が立ならば、此立田、打も擲きもなされませ。此中も宣はせぬか、人にやれば我子でないと、おつしやつての折檻は、母樣とも覺へませぬ。丞相樣の御祕藏姫、杖棒あてゝよいものか。サア自を〳〵」と、姫にかはつて身を厭はず。「イヤお前に科はない。不孝な自打給へ」と、立田を押やる杖の下。立「いやいやお前は打たされぬ」「イヤこな樣は」と折檻の、杖を爭ふ姉妹思ひ、老母は猶も怒の顏色、「コリヤ立田、おりや他人には折檻せぬ。養子にやつた丞相殿は、おれが爲には甥の殿、子にやつた姫は甥孫。親も赦さぬ徒して、大事の〳〵甥の殿、流され給ふは誰が業。憎ふて〳〵、コレ此杖折る程擲ねば、丞相殿へ言譯立ぬ。六十に餘つて白髮天窓、連合に別れた時、剃を剃さぬ立田の前、尼に成ては便がない、力がないと留られて、法名計覺壽と呼れ、邪魔に思ふた此白髮、今日といふ今日役に立た。天窓を剃て衣を著れば、打擲の杖は持れぬはい。傍杖望む立田から」と、走り寄て丁〳〵〳〵、打る姉妹打つ母も、俱に涙の荒折檻。「アヽこれ〳〵伯母御前、卒爾の折檻仕給ふな。齋世

徒―逕奔

の君の御不便有、娘に疵ばし付給ふな。父を床しと慕ひくる、刈屋姫に對面せん。是へ伴ひ給はれ」と、障子の内より丞相の、御聲高く聞ゆるにぞ、老母は杖をからりと投捨、わつと叫んで臥轉び、暫し答へもなかりしが、曼「産の親の打擲は、養ひ親へ立る義理、養親の慈悲心は、産の親へ立る義理。あまき詞も打擲も、子に迷ふたる親心、逢てやろとは姫よりも、母が悦び詞には、云盡されぬ刈屋姫、結構な親持た、持た〳〵」と目に持た、涙の限聲限。二人の娘は何事も、お慈悲〳〵と計にて、泣より外の事ぞなき。曼「コレなふ、爰から禮をいはふより來いと有ばいざ傍へ」と、隔の襖押明れば、管丞相は見へ給はず、逗留の中作られし主の姿の木像計。「コハそもいかに」と刈屋姫、逢てやらふと宣ひしは、母様の折檻をとどめん爲、兎に角不孝な自故、お逢なされて下されぬか。今物をおつしやつたは、父上に違ひはないに、木で作りし父上様が、但しは物を宣ひしか。又は何所ぞへ隱れてか」と、立て見居て見、うろ〳〵。曼「のふ騷がしや刈屋姫、丞相の逗留中、御馳走申は奥座敷、爰へは餘程間數も隔たり、先程聲のかゝつた時、爰へはどふしてござつたと思ひながら、嬉しさに辨へなく、見れば此木像計。次手ながら刈屋姫、咄して聞さふ。逗留の中に主の像、畫いて成共作つてなりと、伯母が筐に下されと、願ふた日か

勢魂も云々―精神も入ちぬ

立ずと―立ずとも

付屆―贈物をする

ら取かより、初手に出來たは打破捨、二度目に作り立られしを、同じく是も打碎き、三度目に此木像作り上て、おつしやるには、前の二つは形ばかり、勢魂もなき木偶人、是は又丞相が魂殘す筐迚、下されし主の姿、物をいふまい共いはれず。帝への恐れ有ば、逢たふても逢れぬ親子。木とな思ひそ刈屋姫、物おつしやつた父上に、逢つて嘸嬉しかろ。母も本望遂げました」と、親子三人悅びの、中へのさ〳〵立歸る、太郎が爺親土師の兵衞「覺壽是におはするか。お客人のお立も明朝、出立の拵へ嘸取込。役に立ずとお見廻申、手傳でも仕らふ、と參りがけに輝國殿の旅宿へもちよと付屆、躬が幸居合せ、用意も大方出來たと聞、先は大慶。兎角する内もふ暮相、一まづ歸つてお立の時分、又參るのも老足なれば、お邪魔ながら是に居ろ。心づかひ成下されな」「兵衞殿の義理々々しい。嫁子の所は内同然、斷に及ぶ事か。用が有ば遠慮なく、仰つたがよいわいの。刻限迄はコレ立田、和女の部屋にお寐間をとりや。後程お目にかゝらん」と、姫を連立入給へば、跡は親子が小聲になり、兵コリヤ道々牒し合した通り、太郎ぬかるな」太「氣遣なさるな親人」と、奥と部屋とへ別れ行。座敷々々は燭臺照し、今宵限の御奔走、とり〳〵さはぐ計なり。土師の兵衞は一間より、そつと拔出前栽の、勝手覺へし切戸口、

張輿―蠻の表を張つた粗末な輿

白相國―白鷄をほめていふ

臺子―茶器を載する棚

錠捻切て押ひらけば、外から相圖の挾箱、指出す中間徒士若黨、「コリヤやい、云付た人數の裝束、丞相を迎ひの張輿、スハといふ時間に合せ」と、家來共先へ歸し、挾箱引だかへ、月かげ漏るゝ木の間〳〵、うそ〳〵窺ふ同腹中。太「親人お首尾は。件の物は參りしか」兵「躰氣遣仕るな。コリヤ此中に計略の彼一物。大事の談合爰へ〳〵」と、大庭の池の邊りで呼く親子、宵から素振に氣を付て、宿禰太郎に目放しせず、立田の前が物かけより、聞共しらず宿禰太郎、「先程お聞なさるゝ通り、判官代輝國、迎に參るは八つの上刻。時平公よりお賴の、菅丞相殺す工面、贋物仕立迎ひと僞り、請取て途中でぐつとはいふ物の、一番鷄のうたはねば、姑の片意地、名殘惜んで渡されまい。八つ鷄の啼ぬ先に、宵啼する鷄是に有か」と、挾箱より取出し、「ホヽ皮膚のよい白相國。とかふする内もふ夜半。一調子はり上、存分にうたふてくれ。一聲聞ねば落付ぬ。親人なぜ鳴ませぬの」兵「イヤ其分では鳴ぬ筈。宵鳴は天然自然、極めては鳴ぬ物、夫を鳴すが祕密事。大竹の中へ熱湯を入、其上にとまらすれば、陽氣の廻るを時節と心得時をつくる。留竹も挾箱に入て來た。臺子の湯もたぎつてあろ。釜ぐちそつと取てこい」太「ホヽ取てくるは安い事。湯を仕かけても鳴ぬ時は」兵「ハテくど〳〵、鳴ぬ時は又分別」と、親子

が工、南無三寶一大事、先へ廻つて、母様へおしらせ申て。イヤそふしては。イヤいはいでは又こちらが、いうてはあちらが、こちらが、と心迷ひし胸撫おろし、立「宿禰様、太郎様は何處に」と尋る聲に、はつと二人が廢忘けでん、鷄隱す挾箱、あたふたしめて左あらぬ風情、「ヤア事々しう呼立るは、何ぞ急な用でも有か。さもない事なら不遠慮千萬。親人も此宿禰も、肝にこたへて惱りした」と、いふ顏つれ〴〵打眺め、立「お前方の惱りより　わしに惱りさゝしやんした。聞へぬ連合舅君、賢迎を拵へて、菅丞相樣殺さふとは、あなたに何ぞ恨が有か。但しは時平に賴れし、欲には馴染の女房も捨、母樣の義理も思はずか　お前は捨る心でも、わしや得捨ぬ太郎樣。コレ申親父樣、思ひとまつて下さりませ」と、舅を拜み夫を拜み、聲も得立ぬ貞女の思、涙操を顯はせり。兵衛は宿禰に詢せし、兵「イヤはや眞身の異見に逢て、親も躰も面目ない。向後心改める、嫁女此事聞流しに」立「アヽ勿體ない。聞流さいでよいものか、御得心と有からは、此世ばかりか未來迄、かはらぬ夫婦舅君。まだ如月の餘寒も烈し、巨燵に膚溫め、酒一つ上たい。サアお出」と、先に立田が、兵「それそこを」心得太郎が後袈裟、肩先四五寸切れながら、振返つて摑みつき、立「エヽ是人でなし、卑怯者、一人の手にも足らぬ者、欺

廢忘けでん―閉口狼狽あたふた―あわてふためくの…（俚言集覽）つれ〴〵―つくづく

先に立田云々―先に立つ立田丈も心得たり太郎

もどぼれ—聲

立田—龍田の紅葉にかく

まんが直る—運が向く

東天紅—鶏の啼聲

殺が本望か。女の義理を立過し、悔しや無念」と罵る聲、「おとぼね立てな」と宿禰が下著、褄先、口へ押込捻ふせ、肝先ぐつと一刎、兵衛は前後に心を配り、「躰息は絶たか」

太「氣遣めすな只今とどめ。扨此死骸は」兵「問ふに及ばぬ此大池。體を浮さぬ、手ごろの石」太「袂や帶にくゝり添」兵「深みへやれ」と二人して、投込死骸は紅の、血汐に染る池迄も、立田が名をや流すらん。太「コレ親人、是は是でも濟ぬは鶏。臺子の湯を取て參らふ」兵「太郎夫にはもふ及ばぬ。鳴す仕やうは身共に任せ」と、武士の嗜む懐中松明、手ばしかく燃し立、池の中へ明を見せ、挾箱の蓋仰向、鶏を上に乘、浮める池の水の面、刀の鐺指延す、腕一ぱいに押やれば、動かぬ水も夜嵐に、立や小波の容裔につれ、半端計流れ行。太「親人何をなさるゝ事。挾箱の蓋を船にして子供のする業おとなげない。あれが何の役に立」兵「ハヽヽヽ、譯を知らずは言ふて聞ふ。惣別淵川へ沈んでしれぬ死骸は、鶏を船に乘て尋れば、其死骸の有所で時を作る、鶏の一徳思ひ出し、池へ沈めた立田が死骸、今一役に立て見る。うまい手番拍子まんが直つて來た。あれ〳〵太郎羽たゝきするは、死骸の上か。そりやこそ鳴たは東天紅、ソリヤ又うたふはとんてんかう一八つにもならぬ宵鳴の、聲さへかへる春の夜や、庭木の塒に羽たゝきして、一鶏鳴ば萬鶏

函谷關―齊の孟嘗君鷄の鳴くまねをさせて越えし關

まだいの―まだ其樣な事いふか

うたふ、「函谷關の關の戸も、開く心地に親子が悦、兵「是から急ぐは菅丞相、迎ひの拵へ氣がせく」と、兵衛は出て行切戸口、宿禰太郎は工の仕殘し、だめを聞して入にけり。早刻限ぞと御膳の拵へ、銚子土器熨斗昆布、妙共に島臺持せ、伯母御座敷へ出給ひ、百日千夜留たり共、別るゝ時はかはらぬ辛さ、此上頼むは御兎の勅諚、歸洛を松の此島臺、行末祝ふ熨斗昆布、菅丞相も此間心づかひの御一禮、互に盡ぬ御名殘。宿禰太郎罷出、「御立の刻限迫、早門前迄迎ひの官人、判官代輝國は路次の用心辻固め、只今旅宿を立申され、輿舁の官人に譜代の家來を相添られ、只今是へ參上」と、怪しの張輿舁入て、時刻移るとせり立る。菅丞相は悠々と大廣間より出させ給ひ、輿に召迄見送る老母、人前作つてにこ〳〵と、泣ぬ別ぞ哀なる。宿禰太郎も御見立、門送りして立歸り、「ヤレ嬉しや仕廻が付た。覺壽樣もお氣休め、寐間へござつて一畳」イヤ寐たふても寐られぬわいの」本「ねられぬとは御氣色でも一畳アレまだいの。客を立てゝ嬉しいと、一道な聟殿の悦、一つ屋敷に居ながらの、暇乞も得せいでの　刈屋蜆が悲しかろ、人の逢のもけなりかろと、かけ構はぬ立田さへ　それで態と呼出さなんだが　機嫌よふ立しやつたを、悦びにはなぜこねぞ。誰ぞいて見てこい」と、いふにきよろつく

宿禰太郎、姦共は立戻り、「奥にござるは刈屋姫只御一人、立田様はござりませぬ」聲「何じやいぬ。内を放れてどこへいきやろ。今一度見てこい。座敷の隅々かくれ〳〵、尋々」と吟味の嚴しさ、挑燈手々に若黨中間、幾人有ても行屆かぬ、花壇築山手分して尋る奥の池のはた、芝に溜つた生血を見付、「コリヤ〳〵此血の流れ込、池を搜せ」と聲々に、水心得た奴共、飛込々々水底より、かづき上たる立田が死骸、驚き騷ぐ家内の騷動、太郎は鼻も動かさず、「殺したやつは内にあろ。詮議濟迄門打て、家來共動かすな」と、わめきちらせば母覺壽、姫もかしこへ轉び出、「コハ誰人の所爲ぞや。先からお顏を見なんだは、伯母様のお傍に、と思ひ設けぬ此死骸、父上には生別れ、お前には死別れ、時もかはらず日もかはらず、悲しさつらさ一時に、かゝる例も有事か」と　老母に取付悔泣。聲「ヲヽ、道理々々。そなたはおれが傍にと思ひ、おれはそなたが傍に居ると、思ひ違が娘が不運。母が因果でおじやるは」と、かつぱと伏て正體なし。太郎傍へ立寄て、「涙が死人の爲にはならぬ。女房共への追善には、殺したやつをひつぱり切。是にて詮議仕らん」と緣端に大胡座、「男女に限らず家來のやつばら、片端から詮義する。マアとつ付におる宅内め。身が前へ出あがらう」宅「ナイ〳〵ない」と、御前にかつつくばひ「人はしらず、

何じやいぬ―何じや居ちぬといふか

とつ付―一番前身が前へ云々―俺が前へ出やがれ

ナイ―はいに同じ

下されうでーやちうと云うてまが〳〵しー忌忌し

拙者めにお疑はござない筈。お死骸を取上た、御褒美を下されうで一番にお呼出し、忝い義でごはりまするでごはります」太「ヤアまが〳〵しい褒美とは横著者め。立田が死骸池に有を、濟は如何して知りおつた。サ、夫吐かせ」宅「イヤあの尻も天窓も見やう筈はごはりませぬ。池の深みへ芝から傳ふた血を證據に」太「ヤアぬかすな。挑燈の灯明で、それがそれと知れる物か。うぬが殺して沈めた池、外の者がどふしてしらふ。血の分では云譯立ぬ」宅「是はお旦那無理おつしやる。云譯立ふが立まいが、池が血へ流れ込た、其外は存じませぬ」太「ヤア池が血へ流れたとは、血迷ふて何ほざく。きやつ詮義場で水くらはせ、白狀さする。それ引立」と、宿禰も續いて立所を、老母押とめ、「イヤ責めるに及ばぬ詞の展轉。嬉しや娘の敵がしれた」太「ハアせめなとは天晴お目高。科極つた罪人、女共へ手向る成敗、大袈裟に打放す。腕を左右へ引ぱれ」と、刀引さげ立寄宿禰、曼「イヤ是成敗は常の科人。袈裟に切ては只一思、苦痛させねば腹が癒ぬ。娘の敵初太刀は此母、跡は聟殿刀を借る」と、かひぐ〳〵しくも裙引上、向ふ目當は奴にあらず、油斷太郎が弓手の豁、突込刀に宅内は、命拾ふて逃て行。宿禰太郎は急所をさよれ、もがき苦しむ息の下、「身共に何の科有て、老悖めが」といはせも果ず。曼「覺へないとは、

ほざくーぬかす

展轉ー心を移し動かすをいふ色色に詞のかはる事（瑠璃天狗）

油斷太郎ー油斷大敵にかく

鼻の先云々・女の智恵の淺き話

いはさぬ〳〵。我科を人に塗り、成敗をして見せだて。裙はせ折た下著の褄先切て有、其切はコリヤ立田が口に聲立させぬ無理殺し、齒をかみしめ放さぬ褄先、切た事を打忘れ、儕が科を儕が顯はす極重惡人。死骸の前で敵を取、母が娘へ手向の刀、肝先へこたへたか」と、大の男を仕とめる老母、遏に河内郡領の、武藝の筐殘されし、後室とこそしられけれ。稍時移れば「判官輝國、只今是へ御出」と、家來が申に老母は驚き、「丞相は先程お立、誰を迎ひに。心得ぬ事ながら、此方へ通しませい。刈屋姫は奥へ行きや。こいつはまちつと苦痛をさす」と、刀を其儘骸押退け出向へば、輝國も早入來り、「お迎ひの刻限、御用意よくば早お立」と、申詞の先折て、曇「イヤコレ輝國殿、何おつしやる。丞相の迎ひに足下の家來が先程見へ請取て歸られたは、もふ一時も先の事」輝「ヤアこれこれ伯母御、身が家來に渡したとは旁以て心得ず。鷄の聲に刻限量り、只今鳴た旅宿の鷄、八つに參る迎ひの約束。家來といはふが直に身共が參つた迚、刻限も來らず、鷄も鳴ぬ先、渡したといふては濟まい。船がかりの其間伯母御に逢すは、此輝國が情の用捨。今日の今になつて、名殘も一倍、島へはやらぬ、渡したといへば夫で濟と、鼻の先な女子の了簡。菅丞相の怨にこそなれ、爲にはならぬ。儚りな申されそ」曇「イヤ

傷りは申さぬ。庭で鳴た鳥の聲、そこへござつた迎ひの衆、渡したに違ひはないが、請取ぬとおつしやるので、娘が最後聟めがあのざま、思ひ合せばさつきに來たは聟迎ひ」輝「コレ伯母御、内の騒動死人の有上、聟迎ひ嘘では有まひ。讒者共の所爲で有ふ。一時違へば三里の後れ、ほつ付て取返さん」と、せきにせいてかけ出す輝國、「ヤア〳〵判官先待れよ。菅丞相は是に有」と、一間より出給ふ。覺壽は惱り、「さつきに別れた菅丞相、そこにはどふして〳〵」と、不審の立も道理なり。判官輝國打笑ひ、「ぬけ〳〵とした伯母御の傷り、暫時の仰天。丞相是にましませば、輝國が安塔々々。見へ渡つた此御難義、譯も聞たし、力に成て進ぜたけれど、私ならぬ警固の役目、早刻限も移りぬれば、いざ御立」と勸むる所に、一先程見へた警固の役人、たつた今門前迄」覺「何じや警固が。ハテよい所へ戻られた。嘘つかぬ覺壽が證據。是へ通し、輝國殿へ見せませう」輝「イヤ身が名を衒つた聟役人、直に逢ては惡かるべし。忍んで樣子を窺はん」と、丞相諸共一間の障子、引立内に隱れ居る。輿に先立警固が大聲、「コレ老母、輝國の名代とけあなづり、とでもない物身共に渡し、能ぬつけりさゝれたの」覺「是は迷惑、菅丞相を請取ながら、とでもないとは何おつしやる」警「アレまだぬつぺり。丞相は丞相でも、木

安塔―安堵

けあなづり―侮る事けは發語
ぬつけり―知らぬ顔で人を欺く
次のぬつぺりも同じ

で作つたはこつちにいらぬ。肉付の菅丞相、替る氣で持て來た木像、コリヤ此輿に」といふに覺壽も心付、「エヽ忝い。扨は魂を込られし木像で有たかい」猶も證據を見屆けん、と心の悦び押隱し、「此方の言分合點がいかぬ。其木像見せさつしやれ」驚「ヲチしやちこばつた荒木作、サア今見せふ」と明る戸の、輿に召たは木像ならぬ優美の姿。菅丞相莞爾と笑ふて立出給へば、驚固はぎよつと靮顔、覺壽も違ひし心當、障子の内と今見る姿、心どきまぎ疑ひながら、覺「アヽよう戻して下さつた。慥に伯母が請取ました」驚「ヤアどこへ〳〵、そりやならぬ。とはいふ物の、連て歸つて見たのは木像、すりかへられたと氣が付て、かへに戻つた、爰ではほんの菅丞相。おれが目の惡いのか、見所に寄てかはるはい」覺「イヤ替らふがかはるまいが、戻された菅丞相、いざ此方へ」と立寄覺壽、驚「ヤア箆太い」と突飛し、丞相を又輿に乘、戸を引立て家來に向ひ、「コリヤわいらも樣子を見る通り、いかにしても怪しい事共、此分では歸られず、念の爲家搜しする」と、踏込先に宿禰太郎、半死半生のた打苦しみ、「南無三寶、太郎樣が切れてござる。旦那々々」と呼聲に、驚固の中から親兵衛、前後もさらに辨へず、走寄て引起し、「コリヤ躰、此深手はどいつが所爲、相手を知らせ」と氣をせいたり。覺「の

姫殿―男の親と壻の親とをいふ（瑠璃天狗）
棟梁―おかしら
擬勢云々―勢も抜けてぬけ〳〵にとつかに―愈遊

ふ兵衛殿、相手は姑。ア、私が手にかけた」兵「ヤア聟を手にかけ、落付自慢。何科有て身が躰を」曇「ヤアとぼけさしやんな姫殿、そいつが立田を殺した時、こなたも手傳ひ仕やろがの。娘の敵切たが何と。贋迎の棟梁殿。何も角も顯はれ時、さつぱりといふた〳〵」兵「エ、殘念々々。躰めが出世を思ひ、時平公に一味して、菅丞相を殺さん爲、鷄に宵鳴させ、十が九つ仕課せた兵衛が方便、腐り婆めに嗅ぎ出され、殺された躰が敵。覺悟ひろげ」と飛びかゝるを、「ヤアさはさせじ」と判官輝國、木蔭より顯はれ出、覺壽をかこふて突立たり。兵「マアどなたが出てもびくともせぬ。兵衛が工みの破れかぶれ、死物狂の働き見よ」と、切てかゝればかいくぐり持つたる刀踏落し、利腕つかんで引くりかへし、足下に踏付け大音上、輝「ヤア輝國が家來共、贋者めらを片端から、くゝれ〳〵」といふ聲に、始の擬勢ぬけ〳〵に、一人も殘らず逃失せたり。覺壽はとつかは輿の戸の、明る間嘸やお氣詰と、内を見ればこは如何に、筐の木像又幌り、一是はいかに」と立歸り、こなたの障子押明れば、「伯母御騒がせ給ふな」と菅丞相の御詞、髮でも恂りかしこでも、恂りびくりに心の迷ひ、曇「どちらがどふじや輝國殿。目利なされて下され」と、問るゝ人も問人も、「軈れ果たる計なり。丞相重て、「輝國の迎ひ遲參

暫時の間―此下に寢たりの意あり

逆緣―親が子を弔ふ

種々因緣云々―樣々の因緣によりて佛道を求む

我見彼土恒沙菩薩種々因緣而求佛道（法華經）

故、睡む共なく暫時の間。物騷しく聞へし故、窺ひ見れば兵衞が工み、太郎が所爲、立田の前ははかなき最期、是非もなし。伯母御の心底さこそ〳〵。某是へ來らずば、かかる歎も有まじ」と、今更悔の御涙。曇イヤ娘が命百人にも、かへがたき大事のお身、怪我過のなかつたを悅びこそすれ、何の泣こ。何の〳〵」といふ目に涙、「このふ輝國殿、惡事の元は其兵衞、此世の隙を早ふ〳〵。太郎も俱に」と立寄て、髻引上、「丞相の堅固の有樣、おのれ親子に見せたが本望。娘が恨も晴つらん」と、刀を拔けば息絕たり。「へエ憎いながらも不便な死ざま。有爲轉變の世のならひ、娘が最期も此刀、聟が最期も此刀、母が罪業消滅の、白髮も同じく此刀」と、取直す手に髻拂ひ、「初孫を見る迄と、貯ひ過した恥白髮、孫は得見いで憂目を見る、娘が菩提逆緣ながら、弔ふ此尼。種々因緣而求佛道、南無阿彌陀佛」と唱ふれば、菅丞相も唱名の、聲も涙に同向有。判官輝國大きに感じ、「伯母御前に先とられ、跡にさがつた儕が成敗、强欲非道の皺頭」と、水もたまらず打落す。覺壽は木像抱抱へ、菅丞相の右手の方、御座を竝べて直し置、「兵衞親子が工みも顯はれ、何も角も納りし、此木像の不思議な働き。かゝる例も有事かや」菅「いやとよ最前もいふ如く、匹夫々々が工みも顯はれ、我急難を遁れしも、暫時の睡眠

巨勢金岡―宇多帝時代の畫聖此話古今著聞集にあり　呉道子―唐玄宗時代の畫工、此話名畫錄に出でたり　外に荒木云々―餘所ならず此の荒木の天神となり　伏籠―箱物を被せて中に香を燻くに用ふる籠　きかねども―嗅がねども　名は大方云々―香の名に刈屋姫をかけて伏籠の中に刈屋姫居るを知らせたり

前後をしらず。木に彫み筆に畫例は、本朝名高き繪師、巨勢の金岡が書たる馬は、夜な〳〵出て萩の戸の萩を喰、唐土にも名畫の譽、呉道子が墨繪の雲龍、雨を降せし例も有、又神の尊像木佛などの、人の命にかはらせ給ふ例は、かぞへ盡されず　菅丞相が三度迄造り直せし物なれば、木にも魂備はつて、我を助けし物やらん。讒者の爲に罪せられ、身は荒磯の島守と、朽果る後の世迄、筐と思し召されよ」と、仰は外に荒木の天神、河内の土師村道明寺に、殘る威德ぞ有がたき。輝國四方を打眺め、一思はざる義に隙を取、夜も明はなれ候へば、御立ぞふ」と申にぞ、又改る暇乞、「伯母が寸志の餞別せん。用意の物こなたへ」と、刈屋姫の上著の小袖、かけたる伏籠諸共に、御傍近く取直させ、聲「浪風あらき楫枕、餘寒を凌がせ申さん爲、伯母が心をたきしめた、小袖を島迄召さるゝ樣に、輝國のお世話ながら賴まする」と有ければ、輝「是は宜しき進ぜ物、苦の香防ぐとめ木の小袖、家來に持せ參らん」と、立寄伏籠に手をかくる。丞相しばしととめ給ひ、「御恩を厚く込給ふ、伏籠にかけし此小袖、中なる香はきかねども、名は大方伏屋か刈屋。伯母御前より道眞が、申請し女子の小袖、我身にはあはぬ筈。身幅も狹き罪人が　たゞ此儘に、お預け申す。我小袖と思し召、立田の前が追善の、佛事も倶

泣たは云々―伏籠の中で泣たはつまり刈屋姫の爲となり

鳴はとそ云々―鶏が鳴くから別れにやなちぬいつそ鳴かぬ里へ行きたい

籠の鳥云々―今囚れの身となつて昔の禁中のさまを忍ばる

鳥の子云々―二句共に便る所を失ふ喩

に」と伯母御前の、心を悟る御詞、骨身にこたへ忍び兼、思はずわつと聲立て、歎くに扨はと輝國も、心を感じ萎れ入。覺壽が心は伏籠の内、「泣たは結句あの子が爲、別れにちよつと只一目、伯母が願を叶へて」と、立寄る袖を引とめ、聲「お年故のそら耳か、今鳴たは慥に鶏。あの聲は子鳥の音、子鳥が鳴ば親鳥も、鳴は生有ならひぞ」と、心の歎を隱し歌、「鳴ばこそ別れを急げ鶏の音の、聞へぬ里のあかつきもがな」と詠じ捨、「名殘はつきずお暇」と、立出給ふ御詠歌より、今此里に鶏無く、羽たゝきもせぬ世の中や、伏籠の内をもれ出る、姫の思ひは羽ぬけ鳥、前後左右をかこまれて、父は元より籠の鳥、雲井の昔忍ばるゝ、左迁の身の御歎き。夜は明ぬれど心の闇路、照すは法の御誓ひ、道明らけき寺の名も、道明寺迎今も猶、榮へまします御神の、生るが如き御姿、爰に殘れる物語、盡きぬ思ひにせきかぬる、涙の玉の木槵樹、珠數の數々くりかへし、歎の聲に只一目。見返り給ふ御顔ばせ、是ぞ此世の別れとは、知らで別るゝ別れなり。

第三

鳥の子の巣に放れ、魚陸に上るとは、浪人の身の喩種、菅丞相の舍人梅王丸、主君流

罪なされてより、都の事共取賄ひ、御臺のお行衛尋んと、笠ふかぐと深緣、土手の竝木にさしかゝれば、向ふからも深編笠、我に逢はぬ其出立、互に夫ぞと近く寄、「梅王丸か」梅「コレハ〳〵櫻丸」櫻「ヤレそちに逢ひたかつた」梅「マア喧す事、聞く事有り」と兄弟木蔭に笠傾け、梅「扨先問はふ。其方は日外加茂堤より、宮姫君の御跡慕ひ尋行しと、内寶八重の物語り、何とお二方に尋ね逢うたか」櫻「成程道にて追付奉り、菅丞相御流罪と聞より、對面なさしめ奉らんと、安居の岸迄御供せしに、御對面叶はず。輝國殿の計には、御歸洛願の妨と、お二方の御緣も切れ、姫君は土師の里伯母君の方へ御出、齋世の宮樣は、法皇の御所へ供奉し奉り、事治りしと云ながら、納らぬは我身の上。冥加に叶ひお車を引、其有がたい事打忘れ、賤しい身にて戀の取持、終には御身の怨と成、宮御謀叛と讒言の種拵へ、御恩請たる菅丞相樣流罪にならせ給ひしも、皆此櫻丸がなす業と、思へば胸も張裂如く、今日や切腹、あすや命を捨ふか、と思ひ詰は詰たれど、佐太におはする一人の親人、今年七十の賀を祝ひ、兄弟三人嫁三人、竝べて見ると當春より、悅びいさみおはするに、我一人缺るならば、不忠の上に不幸の罪、せめて御祝義祝ふた上と、詮なき命けふ迄も、ながらへる面目なさ、推量有梅王」と、拳

内寶―内室に同じ

を握り齒を喰しめ、先非を悔たる其有樣。梅王も理と、暫し詞もなかりしが、「チヽ道理〳〵々々。我迚も主君流罪に逢給ふ上は、都にとどまる筈なけれど、御館沒落以後、御臺樣のお行衛しれず。先此方を尋ふか、筑紫の配所へ行ふか、と取つ置つ心ははやれど、其方がいふごとく、年寄た親人の七十の賀の祝も此月、是も心にかゝる故思はず延引。互に思は須彌大海、是非もなき世の有樣」と、兄弟顏を見合せて、涙催す折からに、鐵棒引て先拂ひ、「先退て片寄」と、雜式がいかつ聲、梅王立寄、どなたぞと尋れば、雛本院の左大臣時平公、吉田への御參籠、出しやばつて鐵棒くらふな」と、言捨て急ぎ行。梅「何と聞たか櫻丸、齋世の宮、菅丞相を憂目に逢はせし時平の大臣、存分いはふじや有まいか」櫻「成程々々〳〵、よい所で出つくはした」と、兄弟道の左右に別れ、尻引裏げ身構へし、今や來ると待居たる。程なく蘇く車の音、商人旅人も道をよぎる、時平の大臣が路次の行粧、さながら天子の御幸のごとく、隨身青侍前後に列し、大路せばしと輾せたり。兩人木蔭を飛んで出、「車やらぬ」と立ふさがる。隨「ヤア何者なれば狼藉する」と、顏を見れば松王が兄弟、梅王丸櫻丸。「ムヽ聞へた。主に離れ扶持に離れ、氣が違ふての狼藉か。但しは又此車、時平公と知つてとめたか、知らいでとめたか。返答次第兄

須彌大海―多きこと
いかつ聲―鋭き聲

いはれぬ―いちざる

弟辿用捨はせぬ」と、白張の袖まくり上、摑みひしがん其勢、梅王丸冷せ笑ひ、「ヤアいふな〳〵。氣も違はねば此車、見違へもせぬ時平の大臣。齋世親王菅丞相讒言によつて御沈落」響其無念骨髓に徹し、出合所百年目、と思ひ設けし今日只今」梅櫻丸と此梅王、牛に手馴し牛追竹、位自慢で喰ひ肥た、時平殿の贔屓一つ三つ、五六百くらはさねば堪忍ならぬ」響「いはれぬ主の肩持顏」二人「出しやばつて怪我ひろぐな」隨「ヤア法に過た案外者、アレぶちのめせ、引くゝれ」と、供の侍聲々に、前後左右に追取卷。兄弟は事共せず、取ては投退け摑んでは、ぶち付〳〵投付れば、傍に近付者もなし。松王焦つて、「ヤア命しらずのあばれ者、いづれもはお構ひ有な。御主人の目通、御奉公は此時節。兄弟と一つでない忠義の働きお目にかけん。コリヤやい、松王が引かけた此車、とめらるゝなら留めて見よ」と、鼻づら取て引出す車。兄弟「ホヽウ櫻丸梅王丸、爰になくばいさしらず。一寸なりとやつて見よ」と、兩人轅に手をかけて、「エイ〳〵エイト」と押戻せば、牛も四足を立兼て、跡へ〳〵とすさり行。松王車の後方へ廻り、兩手をかけて力足、やらんやらじの諍は、世にも稀なる三つ子の舍人、互に劣らぬ主思ひ、命限り根限り、やつゝ戻しつ引合車、大地は藥硎と掘穿、土ににへ込車の轍。「ヤア面倒

輗―車の轅の横木

牛扶持―牛には蠅がたかる故いふ。宙だめ―宙にさし上げ

先途と―原本せんと

あへす―流す

うづ虫―うぢ虫

な畜生め」と、輗を放せば逸散に、牛は離れてかけり行。車の内ゆるぐと見へしが、御簾も飾も踏折々々踏破り、顯れ出たる時平の大臣、金巾子の冠を著し、天子にかはらぬ其粧、赫々たる面色にて、「ヤア牛扶持くらふ青蠅めら、轅にとまつて邪魔ひろがば、轍にかけて敷殺せ」兄弟「ヤアさいふ大臣を敷殺さん」と、二人が力に、車を宙だめ、引くりかへすを返されじと捻合松王、右へ押ば左へ押、上げつおろしつ二三度四五度、爰を先途と揉合しは、祭の神輿に異ならず。時平は上より金剛力、どうど踏だる其響き、車も心木もこな微塵、碎けし轅を銘々提、大臣を打んと振り上る。時「ヤア時平に向ひ推參なり」と、くはつと睨みし眼の光り、千世界の千日月、一度に照すが如くにて、遺の梅王櫻丸、思はず跡へたぢ〳〵〳〵、五體すくんで働かず、無念々々と計なり。松「何と我君の御威勢見たか。此上に手向ひすると、御目通りで一討」と、刀の柄に手をかくれば、「ヤア松王待々」と、車より飛でおり、「金巾子の冠を著すれば、天子同然、太政大臣」となつて、天下の政を執行時平が、眼前血をあへずは社參の穢、助けにくいやつなれ共、下郎に似合ぬ松王が働き、忠義に免じて助けてくれる。ハレ命冥加なうづ虫めら」と、邊りを睨んですゞみ行。ふり返つて松王丸、「よい兄弟を持つて兩人共に仕合者。命

四郎九郎―松王兄弟三人の父

祝じやてゝ―祝じやというて

もちゝ―我等

を拾ふた有難い　忝い、と三拝せよ」と、いはれて兩人くはつとせき上、櫻「エヽ儕にも云分有共、親人の七十の賀、祝義濟迄ナウ梅王」梅「ヲヽ、其上では松の枝々切折て、敵の根を斷葉を枯さん」松「ヲヽ、夫は此松王も親父の賀を祝ふた跡で、梅も櫻も落花微塵。足元の明い中、早く去〳〵」兄弟「ヤア推參な。歸るを儕にならはふか」と、詰寄々々兄弟三人、互に殘す意趣遺恨、睨んで左右へ　三重別れ行。春さきは、在々の鋤鍬迄も樂々と、遊びがちなる一農、一番村で年古き、人に知られし四郎九郎、律義一遍屑にて、菅丞相の御領分、佐太に手輕き下屋敷、お庭の掃除承はり、松梅櫻御愛樹に、つちかひ水の養ひも、根が農の鍬仕業、我身の老木朧なく、幹をこやしの百姓業、畑の世話より氣樂なり。堤端の十作が鍬打かたげ、門口から、「四郎九殿内にか」と這入を見付、四「こりや十作畑へか」十「イヤ今仕廻ふて戻つたりや、嚊がいふには、何やら目出たい祝ひじやてゝ、大な重箱に、眼へはいる樣な餅七つ、朝茶の鹽にも喰足ねど、貰はぬよりも　忝い。禮もいひたし、祝とは、マア何でござる」四「サイノ菅丞相樣のふつて涌た御難義、お下に住むおらゝが、身祝ひ所じやなけれど、爲にやならぬさかいで爲るは爲るが、世間へも遠慮が有て、彼岸團子程な餅七つ宛配つたは、此四郎九郎丁度七十、此春年頭のお禮に登つた時、おらが年をお

古來稀―人世七十古來稀（杜詩の句）
御師―卑しき神官
白黑まんだらかい―四郎九郎なれば白黑斑と洒落たり
抱へ―抱帶にて今の扱帶
三十石―淀川を上下する三十石船

尋。七十と申たりや、古來稀な長生、其上珍らしい三つ子の爺親、禁裏から御扶持下され、躬共は御所の舍人、目出たい〳〵、産れ月産れ日、産れ出た刻限違へず、七十の賀を祝へ、其日から名も改とて、ノウ聞しやれ、伊勢の御師か何ぞの樣に、白大夫とお付なされた。則今日が誕生日。白黑まんだらかいは掃溜へ投て退け、今日から白大夫といふ程に、そふ心得て下され」十「夫はめでたい。次手ながら問ましよ。三つ子産むと扶持下さる、其謂も聞かしやつたか」九「サイノ死んだ女房が産だ時は、邊隣の外聞ひよんな事じやと、思ふたがもつけの幸。三つ子の爺親、一代は作取の田地三反、日本計じやないげな、唐迄もさふじやてゝ、男の子なりや御所の牛飼、女郎なれば東童とやら、是も御所でつかはるゝ。法式は忝い物。旦那殿は流罪なれど、おらは所も追立られず、下された田地は其儘。そちの嚊も若い程に、産すならおらにあやかりや」と、咄しの中道たどりくるは、櫻丸が女房八重、今日は舅の祝ひ日迚、風呂敷包片手に提、「嬉しや爰じや」と笠取ば、白「ホヽ、櫻丸が女房八重か、早かつた〳〵。外の嫁御も揃ふてくるか。マア〳〵上つて抱へも解きや」八「アイ〳〵まだ皆樣はお出ないか。遲かろと氣がせいて、淀堤から三十石の飛乘、船の足の早いので、草臥もせず早ふ來たが仕合せでござんする」十「ヤコレ四

郎九殿、お客そふな。もふ往にましよ」白「エヽ是四郎九とは、物覺がない十作。白大夫早忘りやつたかいの」土「イヤ忘れはせぬはいの。餅の祝とは格別、名酒呑ねば何時迄も四郎九郎」白「ハレヤレ盛た酒を飲ぬとは、但しはまだ呑足ぬか」土「エヽぬけ〳〵と嘘いふわちよ。おらに酒いつ盛た」白「ヲヽさつきに盛た。コレ樽や徳利は目に立故、餅の上へ茶筅の先で、酒鹽打てやつたので、二度の祝濟だじやないか」土「エヽ夫で聞へた、嗅が酒くさい餅じやといふた。外へは遠慮でそふ仕やろと、おらは日來懇だけ、晩に來て寢酒一ぱい。お客是に」と出て行。白「嫁女アレ聞やつたか。今の世の人は、きめごまかで、おらが始末の手目見付て、晩にきて寢酒給ふ、ハヽヽヽアヽせち賢い懇ぶり」八「イヤ又お前も餘りな。聞も及ばぬ茶筅酒、ホヽヽヽ」白「ハヽヽヽ」と、嫁と舅の睦しさ。梅王松王兄弟の、女房が來る道草も、女子の手業笠に摘込み、蒲公英薺蒿枸杞の垣根を目印に、「サア爰じや。お春樣マアお先へ」春「イヤお千代樣から」と、相嫁同士が門での辭宜合、白大夫可笑しがり、白「一時に產れた三つ子の嫁共、先の跡の所かい。八重がとふから待つて居やる。どちこちなしにはいれ〳〵」春「ほんに八重樣早かつた。ござんする道なれば、春が所へ誘ふても下さんしよかと、待た程が遲なはつて、心せきな道

わちよ—汝

仕やろと—仕やちうとも

寢酒一ぱい—下に振舞へ」を略せり

手目—仕方

洗草—手間取る意を寄せたり

拘杞—枝に針ある灌木

ござんする—もお出でなさる

寝―もしたしも
の
日脚の云々―時間が過ぎて氣がせく

すがら、千代樣に行合て、連立てくる道轉業。今日の祝の浸にと、薺蒿蒲公英二人の仕業」八「夫はよふ氣が付た。春樣誘ふ約束も、日脚の長たに氣せきして、寄る事も忘れたに、お千代樣とはよいお出合」千「サイナ お春樣に逢たはわしが仕合せ、賑やかな道連。夫はそれじやが親父樣、料理の拵へ出來て有かへ」阜「イヤ出來てない。和御女達に爲す合點。こて〳〵とむづかしい事は入ぬ。今朝搗た餅で雜煮仕や。上置はしれた昆布、隙の入ぬ樣に茹て置た。大根も芋もそこに有。勝手は知まい、ヤアゑい〳〵」と立上れば、嫁「イヤ申、今日の祝ひはお前が目當、料理方の出來る迄、何にも構はず一寢入なされませ」勝手しらねば三人寄て、何も角も取出す。阜「左樣じやてゝ、立た次手、棚な物下してやろ。コレ〳〵是見や、祖父の代から傳はつた根來椀じや。折敷も拾枚、おらが息災なもこの椀折敷、堅地な迚かんまへて手荒ふ當るな嫁女達。これマア躰共はなぜ遲い。來る迄に一鼾」と、體を横に差枕、堅地作の親仁なり。番「コレ皆樣、何ぼう彼樣におつしやつても、雜煮計では置れぬ。飯も焚ざなるまいし、何はせいでも鰹繪、道草の薺蒿お汁によかろ。八重樣千代樣賴ます。此春は飯仕かけふ」と、手々に俎板摺盆、米炊桶にはかり込、水いらずの相嫁同士、菜刀取て切刻み。ちよき〳〵〳〵と手品能、味噌摺音も

ヤアゑい〳〵―ヤツコリヤショ

根來椀―紀州根來寺より出でし椀
かんまへて―注意して

もちやくちやーぶつくさ

賑はしょ。白大夫目を覺し、「こりや躰共はまだ來ぬか。正月から知れて有おらが祝ひ日、油斷せふ筈はないが。ア、此中誰やら、ヲヽそれ〳〵、今いんだ十作が咄しには、時平殿の車先で、三人の子供が大喧嘩、聞てかと知らしてくれた。喧嘩の樣子噂達はしつて居よ。車先での事と有ば、時平殿に奉公する松王が女房、爰へ來て樣子を言や」と、名ざしに合たは千代が迷惑、「お祝事の濟迄は、お前の耳へ入ぬがよいと、三人ながら其心いらぬこと喋られて、隱されねば申ます。梅王樣櫻丸樣、二人の相手にこちの人、日頃の短氣云上つて、兄弟喧嘩。したが氣づかひなされますな、三人ながら怪我もなく、其場は夫で濟だれ共、もちやくちやいふて居られます。春樣八重樣、お前方もそふであろ。氣の毒な男の不機嫌」「成程々々〳〵、千代樣のいはんす通り、今日の祝ひを云立て、兄弟御の中直し、親御のお詞かよらいでは」と、男思の壁訴訟、白「ヱヽ和御寮達に問たらば、知れふと思ふな喧嘩の筋、知て居ても言はぬか。同じ胤腹一時に生れた躰でも、心は別別、よふ似た顏を二子といへど、夫もそれには極まらぬ。女夫子も有、又顏の似ぬ子も有。マア大概顏が似れば心もよふ似て、兄弟の中も能物じやが、おらが躰共、誰が見ても一つ作とは思はぬ。生ぬるい櫻丸が顏付、理屈めいた梅王が人相、見るから如何やら

ありやる―ござる　見せいで―下に「殘念」を畧せり　申―午後四時

いはしやました―いはしやれました

鱞―ひしこの干物、健全の意を寄す

吉野―よしにかく

根性の惡そふな松王が面がまへ。ヤ千代が傍で麁相いふた、氣にかけてたもんな。マア怪我がなうて嬉しうおりやる。怪我の次手に、孫めは健なか、連て來て顔見せいで。ヤア兎斯ふいふ中、もふ七ツじや。おれが生れたは申の刻限、料理も大かた出來たであろ。嫁達膳を出さぬかい」春「アイ〳〵、刻限の過る迄、連合衆はなぜ見へぬ。千代樣八重樣道迄往て見て來まいか。爰で待より三人ながら」「ござんせ」「往かう」舟「ヤア嘸達何云ふぞい。子供共は來て居るはい」「アノ來てじやとは、どこに〳〵」舟「ヱ、鈍な嫁共、其處に居るを得しらぬかい。コレ三本のあの木が子供等、梅王松王櫻丸、顔は殘らず揃ふて有。勿體ない菅丞相樣、くょめる樣にいはしやました。生日の刻限が違や惡い。祝義には蔭の膳も居るならひ、サア〳〵早ふ」と白大夫が、いふに猶豫も成がたく、俄に盛やら箸打やら、椀の向ふの小皿に鱞、「先一番に親父樣、是でお居りなされませ」と、給仕は元よりならはねど、見馴れ聞馴れ舉動ひ、八重が配膳御所めけり。舟「イヤおれも彼處へいこ」「イヤ土間では冷が上ります。やつぱり爰で」と押供へ、是から面々夫の給仕、膳を捧げて庭に下り、八「此梅の木が梅王殿、枝ぶりずんと日頃の氣質、八重が連添ふ男振、木ぶりも吉野の櫻丸、是は千代迄添遂げる、女夫が中の若緑、色も艶々勢ひよい松

王殿で、子達も揃ふ。サア親父様、目出たふお箸なされませ」自「ホヽなされふ共〳〵、親甲斐に座が高い。子供共へドレ挨拶」聟「ハテなふそれには及びませぬ。お加減のさめぬ内」自「イヤ〳〵お春そでおじやらぬ、親でも子でも極つた辭宜作法」と、庭に下りるもまめやかに、樹の前に畏り、「イヤ是子供衆、何にも御座らず共、かふまいつて下されい。親が折角おりての辭宜、辭宜返が仕たふても、動かれぬは知れて有、爰で〳〵。ハヽヽハヽ嗅達、餅を替やいの」と、尻もちついて悅び笑ひ、我膳に押直り、箸を取るより、「ムウ〳〵扨鹽梅じや、味いは〳〵。三人の嫁女達、給仕も片いきせぬ樣に、三杯は喰合點で、歌おじやらしまするじやなんよゐ、ハヽヽヽこりや新しい三方、土器、誰が持て來ましたぞ」聟「イヤ夫は八重樣の」自「ハテ氣が付て忝い。春も何ぞくれるかい」聟「眞に忘れてをりました」と、扇三本紬土產、「中の繪は梅、松、櫻、お子達の數を祝ふて、三本ながら末廣がり、目出たふ祝ふて上まする」自「こりやめでたい忝い。中の繪も咄しで知れた、明て見るに及ばぬ、此儘々々。コレ戴きます〳〵」と、機嫌に千代が袂から、「是は切の有合で、私が縫た手づつ頭巾、頭に合はずは縫直さふ、お召しなされて下さんせ」白「ヲヽどれも〳〵不足もない心付な、おくりやり物。サア盃も濟だは、おれが膳から

聟やいの―聟へ
やねの
片いき―片マハリ

手づつ頭巾―拙き頭巾

十二銅―寒銭十二文

立そに云々―せきたてゝ。

上てたも、子供等が膳は盛た儘、冷たで有ふ盛直して、コレ嚊達、二人前づつ喰てたもや」「イヱ〳〵私等はまそつと待て、主達が見へてから、打竝んで祝ひましよ」白「そんならそれよ。おれは村の氏神様へ參つて來ませう」「そんならお參りなされませ」白「ヲヲ〳〵往きましよ。拵へて置た十二銅、そこに有取てたも。三本の此扇、末廣ふに子供の生先、氏神へ賴んだり見せたりせう。ヤア八重はまだ參らまい、次手ながら連立ふ。サア〳〵此方へ」と機嫌よふ、表をさして出て行。羣「コレちよ様、年寄しやつても物覺へのよい事。こな様や此春は、氏神様知つて居る、八重様は今が始め」千「言はしやんすりや其通り。物覺へのよい親御に違ひ、物忘れする子供達、松王殿何故遲いぞ」羣「此方の夫もなぜ見へぬ。但しは來ぬ氣か」千「今日見へいで好い物かいな」羣「それこそ其處へ松王殿」千「ヱヽ是女房を立そに立して、刻限過たをしらずかい」松「ヤアべり〳〵とかしましい。時平様の御用有て、夫れ仕廻ねば動かれぬ。先へ參つて其譯言へ、と云付たを忘れたか。梅王も櫻丸もまだ來ぬそふな、親仁殿も内にござらぬ」千「サア其親父様は八重様を同道で、も些と先に氏神參り、兄弟衆は未見へぬ」松「ソレ見いな。遲いといふおれは主持、梅王も櫻丸も、主なしの扶持放され。用もない和郎達が、遲いのが眞のおそいの。

女共―春をさす

あたぶの悪い―胸の悪い

腹の皮―可笑しい事

おとましい―とんでもない事

お春殿そじやないか」と、詞の端にも殘る意趣、梅王も日脚はたける、喘いて來かゝり突蒐り、松王には顏ふり背け、梅「お千代殿今日は太義。コリヤ女共、親人と櫻丸、八重も爰にはなぜ居やらぬ」春「イヤ今も松王樣のお尋、櫻丸樣はまだ見へぬ。お二人は宮參」梅「ムヽ櫻丸は何ふして來ぬな。ア待兼る者は來いで、胸のわるい見ともない顏がまへ」と、梅王に當こすられ、松王丸逸徹短慮、「あたぶの悪いねすり言。言ひ分有ば直に言やれさ」梅「何のわれに遠慮せう。わが頰がまへを見る度々、ゲイ〳〵と虫唾が出る」松「ハハヽヽハレ申したり腹の皮、此松王は生れ付て涙脆い。櫻丸や其方が樣に、扶持放されの痩頤。肚饑からふと思ふて遣るが、兄弟のよしみだけ」梅「ホヽ扶持放されと笑ふやつが、喰ふ扶持がろくな扶持か。鐵丸を食すといへ共、心穢れたる人の物を請ずとは、八幡大菩薩の御託宣。心汚れた時平が扶持、有難ふ思ふはな、人でなしの猫畜生」松「ヤア畜生とは舌長な梅王。今一言いふて見よ」梅「ホヽ望みなら安い事。畜生々々どふ畜生」「最赦されぬ」と松王丸、刀の柄に手をかくれば、梅王も反打かへし、詰寄詰めよる二人の女房、「是はマアおとましい、氣が違うたか松王殿」と、千代が夫を抱とむれば、春「七十の賀を祝ひに來て、親父樣に逢もせず、反打つてどふさしやる。祝日に拔てよいか、こ

後れた―贈した
頬げた―口

ちの人梅王殿」と、刀の柄にしがみ付、女房春を取て突退、梅「七十の賀でも祝口でも、堪へ袋のやぶれかぶれ、留立して怪我するな。コリヤ松王後れたな、女房が留るを幸に、頬げたに似ぬ腕なしめ」松「ヲヽ留らるゝを幸とは、我心に引くらべて、松王には慮外の雑言、身が女房が留たより、其方が女房が、親にもまだとの一言、肝先へきつと當り、悚へ〳〵こらへたが、もふ堪らぬ。眞劍の勝負は親人に逢ての後、夫迄の腹癒に砂かぶらせねば堪忍ならぬ。千代に是を預ける」と、兩腰抜てほうり出し、裾引裏けて身拵へ、梅「ホヽ畜生めが、こりやよい了簡。櫻丸が來る迄は松王が命、松王に預ける」と、同じく兩腰ほうり捨、「刃物を渡せば血はあやさぬ。女房共、邪魔するな」とつゝと寄つて、緣より下へ踏落せば、早足の松王、落さまに諸足かけば梅王丸、眞逆樣に落かさなり、摑合鄭合、組では放れ離れては又組合、捻付引伏蹴つ踏づ、双方力も同年血氣盛の根くらべ　千代と春とは二人の兩腰、取れもせうかと氣づかひ半分、傍へも寄れずハア〳〵ハアと、心をあせり氣をもみ上、どちらが勝も負もせず、擲き合たが二人の存分。春「梅王殿もふよいはいな」千「松王殿もふ置しやんせ」二人「やめて〳〵」といふのも聞ず、勝負つかではむだ働、投てくれんと松王丸、嵩にかゝつて押力、ひるまぬ梅王つゝかくる、

がつくり―打傾く狀をいふ（俚言集覽）

肩先ひねつてがつくりさせ、横に抱へる松の木腕、劣ぬ肘骨梅の木腕、絡みもぢつて押合力、双方一度にこけかゝり、もたるゝ拍子櫻の立木、土際四五寸殘る木の、上はほつきりぐはつさりと、折たに驚く相嫁同士、二人が勝負も破角力、俱に靳れて手を打拂ひ、うろつく中へ早下向、「アレ親父樣のお歸りじや」「白大夫樣の」といふ聲に、二人は肩入裾おろし、腰刀指間も有ず戻られし、年は寄ても怖いは親、上へも上らず犬蹲踞、「今日の御祝義お目出たい」と、祝義は述ても赤面し、塵をひねらぬ計なり。親はほや〳〵機嫌顏、「嚊達が先へ來て、七十の賀を祝ふてくれたで　今日の祝はさらりと仕廻た。しれてある刻限、遲いは何ぞ障が有て來ぬに極めた。梅王松王能ふこそ〳〵來てくれた。コレ二嫁女、煮くちたで有ふが、雜煮祝はしてたもつたか」と、折た櫻は見ながらも　誰仕業ぞと咎もせず、呵る所を呵らぬ親、一物有としられたり。梅王丸懷中より用意の一通取出し、「祝義濟で候へば、私の所存の願ひ、是に書付候」と、親の前に指出せば、松王も又一通、「身の上の願ひ是に有」と、同じ所へ直せしは、言ひ合せたるごとくなり。白大夫打笑ひ、「心安いは親子兄弟夫婦斯竝んだ中、願ひ有ば口では言はいで、ぎつとした此書付。さらばおらもぎつとして、代官所の格で捌こ」と、願ひ書手に取上げ、つぶ〳〵

麈をひねる―手持不沙汰の狀

煮くちた―煮え過ぎた

ぎつとした―儼然と

讀も口の中、願ひは何やら聞へねど、春と千代とは、夫の心知つて居る筈、跡先を知らねば案じるは八重一人、八「三人の兄弟鬪諍、親父様お賴み申シ、今日中直と云合した。千代様春様こりや何ぞい。何をいふてもこちの人、櫻丸殿ござらぬ故、心當が皆違ふた。道で眩暈が發つたか」と、見へぬ男を案じるやら、二人の願ひも氣にかゝり、小首傾け案じ居る。親父は二通讀仕廻ひ、「コリヤ梅王、其方が願ひに、旅へ立隙くれとは、ム、推量するに外でも有まい、菅丞相のござる島か」梅「成程々々、〳〵結構な御殿に引かへ、埴生の小屋の御住居、御用聞人なければ、梅王下つて御奉公仕らん、身のお暇」と申ける。白「ム、恩を知らねば、人面獸心といふてな、顏は人でも心は畜生、島へ參つて御奉公がしたいとは、まんざら恩を辨へぬ畜生氣は離れた心。コリヤやい、御臺樣や若君樣、お變も遊ばされず、御座る所も知た上、旅立の願ひじやな」梅「イヤ御臺樣は、其以來お目にもかゝらず、御座所も存ませぬ。併し女儀の御事なれば、若君樣とは又格別。菅秀才の御事は慥に」といはんとせしが、松王を尻目にかけ、「慥に所は存ぜねども、息災に御座有噂」白「ヤイ馬鹿者、大切な菅秀才、御息災なを聞た計、お目にもかゝらず有家も知らず、夫でおのれ忠義が濟か。女儀の身と吐かしおる御臺樣は、主じやないか。コリヤや

又格別―若君と一つにはいはれぬ

い、尤御不自由な配所のお住居、お傍へ參つて御用を聞、膝行役の奉公は、此白大夫がよい役じやはい。血氣盛奉公盛、營丞相の所緣と有ば、根掘葉掘絶さん迚、鵜の目鷹の目、油斷ならぬ讒者の所爲、すはといふ時身を惜まず、御用に立所存はなふて、膝行役を願ふは命が惜いか、敵が怖いか。旅立の願ひ叶はぬ〳〵取上ぬ」と、願書顔へ打付て、はつたと睨む老の腹立、道理至極に梅王夫婦、誤り入たる風情なり。白「ヤイ松王、そちが此願ひを見れば、勘當を請たいとな。ハアハヽヽヽ神武天皇樣以來、珍らしい願ひじやな。ヱヽ不孝といはゞ譬のないやつ、余り珍しい願ひなれば、聞屆けてくれるぞ」と親の了簡、「ハヽハア忝し」と悅ぶ松王勇み立、「親子兄弟の緣を切る、所存も問ず赦されしは、此松王が主人へ忠義、推量有ての事なるべし」白「ハヽヽヽ如何樣、口は調法な物じやな。主人への道立、臍がくねるはい。道も道に寄てな、横に取て行道を、蟹忠義といふはいやい。甲に似せて穴を掘る、と勘當請れば兄弟の緣も離れ、時平殿へ敵對ば、切ても捨ん所存よな。尤善惡差別なく、主へ義は立にもせい、親の心に背くをな、天道に背くといふわい。望叶へてとらする上は人外め早歸れ。隙取らば親子の別、竹幕くらはさふ」と筋骨立て怒聲、松王は思ひの儘、「女房來い」と引立行。千代は遺に親兄

臍がくねる―嘲笑の意
甲に似せて云々―諺にておのれの本分を守ること

狹出し鍔―短刀に用ゐる楕圓形の鍔

さぎや仕ませぬ―持ちはせぬ

兎、名殘も惜き相嫁の、顏を見る目もあかれぬ涙、袂絞つて出て行。烏「ハレヤレ嬉しや面倒なやつ片付た。ヤイそこな馬鹿者、御臺若君の御行衞、尋にいかぬかうせぬか」と、是も手づよふきめ付られ、梅「そんなら島へは」烏「サア行所へはおれが行わい。出て行出て行」をこはがるおはる、「八重樣跡で能やうに、お詫言を」と云捨て、夫婦は門へ、白大夫は唾を呑込んで奧へ行。兄弟夫婦に引わかれ、取殘されし八重が身の、仕廻もつかぬ物思ひ、門へ立そに待夫、思ひがけなき納戸口、刀片手に莞爾笑ひ、櫻「女房共嘸待つらん」と、聲にびつくり走りより、八「ヤアいつの間にやら、來たともいはず、案じる女房を思はぬ仕方。兄弟衆の事について、親父樣のお腹立、其場へは出もせいで、マア何で此方樣は納戸の内に。ヱヽこれナア譯を聞して〳〵」と、聞たがるこそ道理なれ。暫く有て白大夫、狹出し鍔の小脇指、三方に乘しほ〳〵と、出るも老の足弱車、舍人櫻が前に置、「用意能ばとく〳〵」と、いふに女房又悔り、八「ヤアこりや何じや親父樣。櫻丸殿どふぞいなア。何で死のじや腹切のじや。切らねばならぬ譯ならば、未練な根性さぎや仕ませぬ。こなさんが云れずば、親父樣の只一言、案じる胸を休めてたべ。お慈悲〳〵」と手を合せ、泣より外の事ぞなき。櫻「ヤア親人に何御苦勞。是迄馴染む夫婦の中、所存殘

さず云聞さん。某が主人と申もお恐れ多き齋世の君樣、百姓の躰なれ共、菅丞相の御不便を加られ、親人へは御扶持方、御愛樹の松梅櫻、兄弟が名に象り、松王梅王櫻丸、憚り有や冥加なや、烏帽子子に成下され、御恩は上なき築地の勤、三人の其中に、櫻丸が身の幸。人間の胤ならぬ竹の園の御所奉公、下々の下々たる牛飼舍人、勿躰なくも身近く召れ、菅丞相の姫君と、わりなき中の御文使、仕課せたが仇と成て、讒者の舌に御身の浮名、終には謀叛と云立られ、菅原の御家浪落、是非もなき次第なれば、宮姫君の御安堵を見屆け、義心を顯はず我生害。今朝早々爰迄來て、右の段々、生きて居られぬ最期の願ひ、聞屆けて切腹刀。親の手づから下されたはい女房。我にかはつてお禮も申、死後の孝行賴むぞ」と、義を立守る夫の詞。女房わつと聲を上、「仇成戀路のお媒介、親王樣の御惡名、丞相樣の流され給ふ、其云譯に切腹なら、此八重も生きては居られぬ。私は殘つて孝行せい、と胴欲にもよふいはれた。夫よりはまだむごい腹切、禮を申せとは、それが何の禮所。無理な事いふ手間で、いつしよに死とコレ申、女房の願ひ立てたべ。親父樣の思案はないか。コレ俯伏いて計ござらず共、よい智惠出して下さりませ。夫の命生死は、親父樣の御詞次第。御前は悲しうござりませぬか、親の手づから此

竹の園―親王の事蹟の孝王の故事　わりなき―隔てなき上い中

これ俯伏て云々―是より親仁に向つて口說く詞

三方、腹切刀は何事ぞ」と恨つ賴つ身を投伏、悶へこがるゝ有樣は、物ぐるはしき風情なり。白大夫顏ふり上、「子に死といふ腹切刀、むごい親と思ふ、云わけではなけれどな、此曉は我身の悅び、いつもより早く起、門の戸明くれば櫻丸、ヤレ早ふ來てくれた、陸ならば夜通し、但しは船か、サアまあ此方へと呼入て、樣子を聞ば右の次第。白大夫づれが躰には、驚き入た健氣者。とどめても聞入ず、今日の祝義仕廻迄、女房が來ても逢しはせぬぞ、おれが出いといふ迄は、納戸の内に隱れて居い、と一寸延しに命をかばひ、助けてよいか惡いかは、おらが了簡に及ばず、神明の加護に任さん、と最前祝義にくれた扇三本、幸繪には梅松櫻、子供の行末祈る顏で、氏神の祠へ直し置き、信を取つて御闘の立願、櫻丸が命乞。中の繪は上から見へぬ三本の此扇、初手に櫻をとらしてたべ、エヽ上らせたまへと再拜祈念、取上た扇ひらけば梅の花。南無三、是は叶はぬ苦か、神の心を疑ふ御闘の、取直しせぬ物なれ共、助けたいが一ぱいで、取直す次の扇、今度も違ふて又松の繪。賴も力も落果て、下向すりや折た櫻。定業と諦めて、腹切刀渡す親、思ひ切ておりや泣ぬ。そなたも泣きやんな」聖「ヤヽヤヽヽヽヽアレ聞いたか女房共、櫻丸が命惜まれて、老人の心づかひ、御恩も送らず先達不孝、御赦されて下されい。下郎

ながら恥を知り、義の爲に相果る」と、三方取て戴くにぞ、「もふコレ今が別れか」と、泣に泣れぬ夫の覺悟。白大夫目をしばたゝき、「潔い躰が切腹、介錯は親がする。其刀コレ見やれ」と、懷から取出すは、願ひ込だる鉦撞木。「コレ此刀で介錯すれば、未來永劫迷はぬ功力、利劒即是彌陀號」と、撞木を取て打鳴す、鉦もしどろに「南無阿彌陀〳〵、南無阿彌陀〳〵〳〵、南無阿彌陀〳〵〳〵」念佛の聲と諸共に、襟押寛げ九寸五分、弓手の脇へ突立つれば、八重が泣聲打鉦も、拍子亂れて、「南無あみだ〳〵〳〵〳〵」右の臍へ引廻し、聖憚りながら御介錯」自「ヲ、介錯」と、後へ廻り撞木振り上、「南無阿彌陀佛」と、打や此世の別の念佛、九寸五分取直し、喉のくさりを刎切て、かつぱと伏て息絶たり。八重が覺悟も此場をさらず、夫の血刀取上る、枳殼のかげより梅王夫婦走り寄て、「こりや何事」と九寸五分もぎとり捨、親の前に畏り、極「コレ〳〵先程歸れと有し時、表へは出たれど、櫻丸がこぬ不思議、と丞相樣の御祕藏有し、櫻の折たを詮議もなされぬ、彼是不審に存ずるから、裏より忍び立戻り、始終の樣子は承はつた。ヘエ是非に及ばぬあの樹と共に、枯し命の櫻丸。兄弟の最期餘所に見て、親人の鉦鼓に合せ、女夫の者が忍の念佛。あつたら若者殺せし」と、悔む夫婦も聞親も、八重も死なれぬ身の繰言、是非も

利劒即是―念佛すれば罪業の消滅すること利劍の物を斷つが如し（般舟讃）

枳殼―かちたち

涙—なしにかくつど〳〵一々と、八重が事迄つど〳〵に、頼む詞の置土産、冥途のみやげに只念佛、「南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛〳〵、南無阿彌陀佛〳〵〳〵」南無阿彌陀笠打かぶり、西へ行足、十萬億土、亡骸送る親送る、生ての忠義死たる義臣、一樹は枯し無常の櫻、殘る二樹は松王梅王、三つ子の親が住所、末世に夫と白大夫、佐太の社の舊跡も、神の惠と知られける。

涙—なしにかくつど〳〵一々と、八重が事迄つど〳〵に、頼む詞の置土産、冥途のみやげに只念佛、「南無阿彌陀佛〳〵、南無阿彌陀佛〳〵〳〵」と鉦打納め、撞木とかはる杖と笠、白「白大夫は片時も早く、菅丞相の御跡慕ひ、島へ赴く現世の旅立、櫻丸が魂魄は未來へ旅立。此亡骸梅王夫婦を頼むぞ」

西（行云々—從是西方過十萬億佛土有世界名曰極樂（阿彌陀經）

君を思へば云々—當時の流行唄よやヨホイホ、ハリナは拍子詞

飼ひし牛しはちくさい云云—不詳一說にしはちは備馬樂

渡り繻子—舶來の繻子

第四

歌　君を思へばよやヨホイホ、結ぼれ糸のハリナ　とけぬ心がつろござる、いよつろござる。つらき筑紫に立年月、御いたはしや菅丞相、讒者の業に罪せられ、埴生の小家の起臥も、きのふと暮れて今日は早、延喜三年如月半、空も春めく野山の眺め、野飼に召させ奉り、我樂しみは在郷歌、歌君を思へばよやヨホイホ。白「ハヽヽヽヽハア何をがなお氣晴、しはらくさい、どつてう聲、牛殿の手前も面目ない。ヱヽ見れば見る程見事な毛並、角の構へ眼の備、頭持の樣子、骨組肉合惣毛一色、眞黑黑牛、渡繻子も及ばぬ色

艶、天角地眼、一黒直頭、耳小歯違、天晴御牛候よ、ちよ〳〵らのちよせい」と譽めにける。菅丞相はめづらかに、聞馴給はぬ譽詞、「ヤイ白大夫。春は耕し、秋は刈穂の稲を負せ、耕作の助と成牛の善惡能知管。天角地眼と申せしは、角と眼の備への事。一石六斗二升とは、牛を價取其價ひ、升目に積る物やらん、語れ聞ん」と仰ける。烏「さつてもしたり。天下に有とあらゆる事共、余さず洩さず知てござる丞相様、牛の事は御存知なく、お尋に預るは、百姓に生れた一德、お慮外ながら、牛の講釋聞かしやりませ。一黒と申は、俵物の石目ではござりませぬ、毛色を吟味する時は、黒いが極上、それで一黒。次に直頭とは、天窓の見所、頭とは頭、どつちへも傾かず、まんろくなが能さかいで、直頭と申ます。耳小の耳は耳、小はちいさし、隨分耳はちいさいを好みます。扨歯違とは、きやつがおね〳〵にれを嚙む、上下の歯先揃ふは惡し、五一に生たが歯違の歯の見所。次第を上から云立れば、一石六斗二升八合。牛の講釋もふ仕廻でござまする」「誠に性は道によつて賢し。白大夫が咄しを聞、一つの德を得たるは」と、仰にひよこ〳〵小踊して、烏「こりやマアあんたる仰ぞい。親の代から御領分の百姓、三つ子の事迄お世話になされ、御恩に御恩有がたふて、寐た間も忘れぬ此親と違ふて、三人

さつてもしたり―是はしたり

おね〳〵云々―牛は反芻獸なれば折々胃より食を反して嚙む

さかいで―故

あんたる―何たるの訛

ほうつて―捨て
うそ淋しい―うそは發語

の躰共、一人は死る、跡二人は氣も揃はず、面倒な奴等打ほうつて、此太宰府へ參つたは、去年の三月。うそ淋しい不自由なお住居、一年の日數は立ど、月見花見に出もなされず。今日は何と思し召す、牛引けと有御意が出て、私が皺も腰も、ァ、延やかな春の野面。安樂寺へお參詣は、御歸洛の御立願でがなござりませふ」菅「否やとよ、我に科なければ、佛に苦勞かけ奉り、身の上祈る心はなし。讒者の業としろし召ば、罪なき事も世に顯はれ、歸洛の勅諚下るべし。夫迄は菅丞相、月にも花にも目はふれず、私なき臣が心、帝はしろし召れず共、天の照覽明らかなり。安樂寺へ志すは、此曉不思議の靈夢、菅丞相が愛樹の梅、今如月の花盛、都の住居思寐の、枕の硯引寄て、筆に任せて斯く計。東風吹かば匂おこせよ梅の花主なし迎春な忘れそ、と心を延て睡眠みしに妙なる天童、我枕に立せ給ひ、汝憐愍の心深く、仁義を守る忠臣の功、心なき草木迄情を受し主を慕ひ、花物いはねど其驗、安樂寺へ詣見よと示現に依て」と宣ふ所へ安樂寺の住僧杖を便に老の足、夫ぞと見奉りしより、小腰を屈め立寄ば、丞相鞍よりおりさせ給ひ、「住侶の歩行は何國へぞ。我は貴院へ行く折から、是にて對面祝著々々」僧「ハァ愚僧義も外ならず。公の御目にかゝりたく、參る子細餘の義にあらず。夜前不思

延て―述てなり
住侶―御坊
祝著―悦び入る

議の靈夢の告、御慈愛の梅一樹、配所の主に見せよと有、示現にかはらぬ觀音堂の左の方、一夜に生出る不思議さよ」と、語るも聞も正夢の、割符を合せしごとくなり。「是より寺へは程近し」と、住侶伴ひ御歩路、安樂寺に入給へば、それぞとしるき梅花の薫、袖に留木の心地せり。曾「暫く是にて御詠」と、床几直させ褥を設、御菓子小竹筒と住寺のもてなし。白大夫はこつてこて、梅の土際覗き廻り、「こりや不思議、イヤ希代じや。中丞相様途次お住寺の夢咄し、へゝ何をやらるゝやら、そんな事が能ふ有ふ、と誠しない事、疑ふておりましたが、來て見て惚り。此木の枝ぶり花の匂、佐太のお下屋敷に預つて居りました、夫じやく、其梅でござりまする。アゝ神佛の告は爭はれぬ。おらが爰へ來た跡では、水一杯飲まし人も有まいに、ぶきくとした木の色艶、芽立の氣條ついつい。花はうさる程付たれば、梅漬の時分二三斗は慥に生らう。四五升は地を借た年貢代、お寺へも進ぜます。跡は此方の實入々々。今は先腹の實入、御馳走酒下さりましよ。アゝこれお酌、白大夫が盃は、いつつでも此天目、立酒は氣にかゝる」と、床几の傍にちよつつくばひ、口も心も有の儘、見へた通りの律義者、花の眺に一入の興を催しおはする所に、「そりや喧嘩よ。アリヤ拔いた、切合てそりや來るは。寺内へ入な、

留木―酒に熟しめる奇南香
こつてこて―丁寧に
水一杯―木に水一杯やちぬ
氣―云々―若枝の直に延びたる形
うさる―腐る
天目―大茶碗

ふり物―突然にもこるもの
ひあい―危い、此句平家物語にあり
筋斗―ひっくり返す
ござなさず―あ出れなる
一刎―一跳
筑紫―著くにか
ふづくりかけ―だましかけて（色道大鑑）

門打」と、いふ間あらせず踏込々々、打合戰ふ侍二人。寺僧は驚き白大夫、御座を圍ふて、白「アヽこれ〳〵見れば双方旅装束。喧嘩はふり者と有てから、爰で仕廻は付させぬ。出やれ出やれ」といふをも聞ず、打合ふ一人は我子の梅王、「コリヤまあ其方は何として、ハア〳〵ひあいな切られな」と、氣をもみあせる親心、聲の助太刀相人の刀、梅王に打落され、逃るを透さず飛かゝり、片手つかみに筋斗打せ、膝にかためし健氣の擧動。白「ヤレ〳〵出かした、手がら〳〵。ヤ手柄はしたが喧嘩の次第、次には其方が下つた樣子、都の事を案じてござます、幸是に丞相樣、樣子一々申上い」梅「ハッハア恐れながら、梅王が念願達し、變らせ給はぬ御尊體、見奉るは生涯の本望。都に御座有るお二人樣、世を忍ぶお身なれば、一所には置きまされず、若君樣は武部源藏に預置、私が妻、櫻丸が女房、八重と春とは、御臺樣の御介抱。お身の上は指置れ、配所の樣子見て參れ、と仰に幸出船の手番、天運に叶ひ日和まん、千里一刎日數も込ず、夜前此地へ筑紫船。乘合の中に時平が家來、鷲塚平馬、此梅王を見しらぬ馬鹿者、ふづくりかけて樣子を問へば、菅丞相を殺しに來た、と儕が口から最後を急ぐ。寺にござるを能ふ知て、直に仕かける不敵者、梅王が御土產」と、早繩かけてぐつとしめ上、緣柱に猿繋、

心地よくこそ見へにける。丞相御悅喜淺からず、戀しき都の樣子を知す、忠義の花は有情の梅王、示現によつて飛來る花は、非情の此梅の木。有情非情も隔なく菅丞相を慕ひくる、梅に褒美の御言の葉、萱「梅は飛び櫻は枯るゝ世の中に何迚松の難面かるらん」つれなかるらん松王は時平が舍人、枯し櫻は宮の舍人、梅王は我舍人、花の榮へは安樂寺、其名も高き飛梅の、不思議は今に隱れなし。「ヤイ梅王、有がたい今の御歌、此梅に准へ、其方をお譽遊ばし、櫻は枯るゝ世の中とは、死んだ躰を御悔、つれなかるらんと有松王めは、時平に追從してをろな」梅「ホヽ、親人の推量違はず兄弟といふも穢らはしい、畜生めはさて置て、さす敵は此鷲塚。サア時平が工み白狀せい。いやといへば刀の引導、如何じやく」と立かゝる。鷲「アヽこれ聊爾有な。主從の義を立ぬき、命にかへて云ぬは古風、いはして置て殺すも古風。新しう助る樣に殘らず申ス。時平殿は王位の望み、邪魔になる菅丞相、首取て立歸れ、軍陣の血祭して、大望の籤を上、天皇親王院の御所、片端仕廻ふて天下を一呑、身共も公家に成樂。空悅の裏が來て、恥をさらす縛り繩、早ふ解いてくださりませ」と時平が叛逆、一々殘らず、聞し召れし菅丞相、柔和の形相忽ちかはり、御睚に血をそゝぎ、眉毛逆立御憤、都の力を睨付、物

梅は飛び云々―梅王は此處に飛び櫻丸は死したるに松王は何故つれないか此歌榻鳴睡筆の梅はとび櫻は枯ちゝ世の中に松計りこそつれなかりけれの作りかへ

ついど—ついぞ

虚名—無實の名

目の前云々—目の前に知らせんにかく

亂燒—刀の

急ふれやつ—急げや

庫裏方丈—寺所と住持の居間

狂はしく立給へり。白大夫恟りし、「しれて有時平が工み、今聞たか何ぞの樣に、ついぞ覺へぬ怖いお顏、爰から覗しやましても、都へは屆きませぬ。御持病の疝が發れば、セヘン悲しうござります」と、老のぐど〳〵物案じ、「やおれ梅王白大夫、時平の大臣が謀叛の企、聞捨られぬ御大事。赦免なければ歸洛も叶はず、王位を望む朝敵と、しろし召されぬ玉體危し。臣が忠義徒らに此所に朽果る、骸は虚命蒙る共、死したる後は憚りなし。靈魂帝都に立歸り、帝を守護し奉らん。天に誓ひの我願ひ、驗は目の前」白梅の、氣條ぽつきと折取給ひ、「朝敵一味の佞人原、退治の手始め是見よ」と、枝にて丁ど打給へば、平馬が首は飛梅の、氣條も花の亂燒、誠の劒も及びなき、梅の名作御手の中、親子は恐るゝ計なり。「ヤア汝等、かゝる大事を聞からは、片時も早く都に登、時平が工み奏問せよ。我は見上る此高山絶頂に、三日三夜立行荒行、根氣を碎き梵天帝釋、焔羅王、三天王に誓ひを立て、魂魄雲井に鳴雷、十六萬八千の首領となつて、眷屬引列都に登り、謀叛の奴原引裂捨ん。現世の對面是迄なり。急ふれやつ」と御聲も、俱に烈しきはやち風、吹立々々本堂の、甍破れて庫裏方丈、鄙遣戸は木の葉のごとく、庭の立木も飛梅も、花も砂も吹しきる。親子も住寺も大きに驚き、期も來らざる御身を捨、天

白梅花―吐くにかく
朝夕してやる云云―朝夕使ふ膳椀と役行者が常に使ふ後鬼前鬼とかけたり
五器の實云々―飯食ふ爲の修行と洒落たり
鞠ふだ方―主人

帝へ祈誓有、御本意は達する共、御臺姫君若君の、御歎はいか計、とどまり給へ」と御袖に、取付梅王白大夫、弓手馬手へ刎飛し、曾「住僧いたくなとめ給ひそ。早天帝の惠によつて、形は此儘鳴神の、ふしぎを見せん」と散殘る、梅花を取て口に含、天に向つて白梅花、渦く花瓣火焔と成て、雲井遙に行末は、怪し恐ろし。三重夢破る門山伏が螺の貝、吹立々々北嵯峨の、在も山家もぬけめなく、役の行者の跡を追、朝夕してやる五器膳器、五器の實修行と知られたり。舂「ア、やかまし御奉禮殿、貝吹て下さんな。賴ふだ方のお氣結ほれ、夜は碌に御寢ならず、今とろ〳〵とお睡眠、アレまだいの、斷云ても聞入ぬ、無法禮殿、止めやらぬか。そしてから不遠慮な笠も脱ずに内へ這入、うそ〳〵と何見やる。女子計と思やつたら、當の槌が違ひましよ。サア出やらぬか、いにやらぬか」と、呵り轉され御奉禮、門へは出れど目は跡に、心殘して立歸る。舂「エ、どんな奴がうせおつて、御機嫌は如何ぞ」と、障子の此方に手をつかへ、「思ひがけない螺の貝。お目も覺ふ、お痞はのほらぬか。八重樣いかど」と尋れば、八「サレバイナ、いつにない御臺樣、すや〳〵と寐入ばな、貝に驚きなされたか、總身に冷汗。思へば憎い山伏づら」舂「サア私も腹が立て、入る手の中もやらなんだ」と、二人が咄しに御臺所、「イヤなふ山伏の業ではない。恐ろしい

夢を見て、動氣が今に納まらぬ。其夢の物語。春も八重も聞てたも。所は宰府安樂寺、連合の御祕藏が筑紫へ飛梅。梅王丸も一時に下り合せた御悅。梅は飛び櫻はかるゝ世の中に何とて松のつれなかるらん、と卽座の御詠歌、一字も忘れず覺しは、物のしらせの正夢か。まだ其上に時平の家來、丞相樣を殺す工み、事顯れて都の樣子、王位を奪ふ敵の企、白狀するをお聞なされ、以の外なお腹立、赦免なければ歸洛も叶はず、危いは天皇のお身の上、帝釋天へ祈誓をかけ、鳴雷の神と成て、時平に組せし同類共蹴殺し捨んとお憤り、其すさましさ醜しさ、夢とはさらに思はれず」と語り給へば、二人の女房、八「お案じなさるは御尤、さりながら、逆夢と申すれば、却てめでたい御吉左右。なふ春樣左樣でないか」春「成程そふじや、追付御歸洛なされませふ。したが今來た山伏づら、編笠で顏も見せず、物もいはず、うそ〳〵覗いて去におつたが、いかにしても氣にかゝる。夫梅王殿の指圖にて、此嵯峨に人しれず、御臺樣のござりまするを、嗅出しに來た敵の犬。白大夫樣梅王殿も、筑紫へ下つて我々ばかり、もう爰にも置れませね。幸頃日承はれば、法性坊の阿闍梨樣、下嵯峨へ來てじやげな。丞相樣とは師弟の約束、右の樣子を申上、御臺樣の御事を、お賴み申て今日中に、早ふ所が替へましたい。私や一走り

兎角は—何分にも
抱—抱帯にて今のしごき

つばな云々—茅花にて鎧先に喩ふ
多勢云々—大勢に叶はぬ譬

齋料—御飯もち ふ代り

往て來やんしよ。八重様萬に心を付、油斷して下さんすな」八「ヲヽ、春様の能ふ氣が付た。太義ながらいて下さんせ。跡は氣づかひさしやんすな」と、男勝のかひ〴〵しさ。御臺もことなふ御悦び、「コレ春、僧正様に逢つたら、夢の事もお咄し申、善悪の譯聞てたも」春「アイ〳〵、何も角も心得ておりまする。兎角は緩りとして居られぬ」と、抱するやら笠取やら、追付吉左右お知らせ」と、こつ〳〵してこそ急ぎ行、程も有せず時平が家來星坂源吾、「あれこそ丞相の御臺よ」と、手の者連て駈け入を、手早く八重は長押の長刀、御臺を「奥へ」と目でしらせ、「何者なれば、踏込で狼藉。目に物見せん」と振廻す。是「ヤア小ざかしい女め。時平公の仰を請、御臺を迎ひに來つたり。邪魔ひろがば討取」と、下知に隨ひつばなの穂先、切立々々〳〵三重追まくれど、多勢に無勢數ヶ所の疵、長刀杖に立歸り、「ナウ御臺様、もふ叶はぬ、早ふ退て下さりませ。春様はまだ歸らずか。ヱヽ口惜い口惜い、無念々々〳〵」と云死に、はかなき八重が最後の有様。御臺は前後も辨へず、死骸に取付御歎、星坂透さず走り寄、引立行んとせし所に、以前の山伏のつさ〳〵と顯はれ出、「イデ其御臺を齋料」と、飛かゝつて源吾が首筋摑んで、日より高く指上、「冥途の旅へうせおれ」と、泥田の中へ頭轉倒。直に御臺を引だかへ、石原砂道嫌ひなく、飛がごとく

世話をかく—世話やく、此邊近松の釋迦如來誕生會の句をとる

ませよ—子供の大人しきを嘲る詞

誂戲—かちかふ

壓尺—書物の押へにする文鎭

一筆啓上候べく—子供の讀書と一寸申上ますとかけたり

堺重—和泉の堺にて製り出す重箱

に三重進み行く。一字千金二千金、三千世界の寶ぞと、教へる人に習ふ子の中に交はる菅秀才、武部源藏夫婦の者、いたはり傳き我子ぞと、人目に見せて片山家、芹生の里へ所替、子供集て讀書の、器用不器用淸書を、顏に書子と手に書と、人形書子は天窓搔、教ゆる人は取分けて、世話をかくとぞ見へにける。中に年かさ五作が息子、「コレ皆是見や。お師匠樣の留主の間に、手習するは大きな損。おりや坊主天窓の淸書した」と、見せるは十五の涎くり、若君はおとなしく、「一日に一字學べば、三百六十字の敎。そんな事書ず共、本の淸書したがよい」と、八つに成子に呵られて、涎「ませよ〳〵」と、指ざして、誂戲かゝるを殘の子供、「兄弟子に口過す、涎くりめをいがめてやろ」と、手ん手に壓尺振廻はす、自然天然肩持も、傳ふる筆の威德かや。主の女房奥より立出、「又こりや例の鬪諍か　おとましや〳〵。今日に限つて連合の源藏殿、振舞に往てなれば戻も知れぬ。ほんに〳〵こなた衆で、一時の間も待兼る。今日は取分寺入も有筈、晝からは休ます程に皆精出して習た〳〵」子供「ソリヤ又嬉しや休みじや」と、筆より先に讀聲高く、甲「いろはに」乙「此中は御人被下」丙「一筆啓上いべく」の、男が肩に堺重、文庫机を擔はせて、利發らしき女房の、七つ計な子を連れて、「賴みませふ」と云いるゝ。內にもそれと早悟、戶「此

方へおはいり遊ばせ」と、いふもしとやか「アイ〳〵」と、愛に愛持つ女子同士。來た女房は猶笑面、「私事は此村はづれに、輕う暮してゐる者でござりまする。此椀白者をお世話なされて下さりよか　とお尋申におこしましたれば、おこせ、世話してやろ、と結構なお詞にあま へ　早速連れて參じました。内方にも御子息樣がござりますげなが　どのお子でござりますぞ」戸「アイ是が源藏殿の跡とりでござります」玄「コレハ〳〵よいお子樣や。外にも大勢の子達、いかゐお世話でござりましよ」戸「アイ御推量なされて下さりませ。シテ寺入は此お子でござりますか。名は何と申ます」玄「アイ小太郎と申まして、椀白者でござります」戸「イヽヤイヤ氣高いよいお子や。折惡ふ、今日は連合源藏も、振舞に參られました」玄「是はマア お留主かいな。お待遠なら私が呼に參りましよ」戸「いへいへ一玄「幸 私 も參つて來る所が有ば、其内にはお歸りでござりませう。コレ三助、其持つて來た物。あなたの傍へ上ませ」三「アッ」ト答へて堺重、櫃に乘せたる一包、内義の傍へ差出す。戸「是はマア〳〵いはれぬ事を」玄「イヤおはもじながら此子が參つたしるし。此堺重は子達への土産、取弘めて下さりませ」と、いはねどしれし蒸物煮染、我子に世話を燒豆鬲、粒椎茸の入たるは、奔走子とこそ見へにけれ。戸「是はマア何から何迄、取揃

寺入―入學者
振舞―馳走に呼ばれて行きたり
いはれぬ―せずともよい
奔走子―愛子

へて御念の入た事。戻られたら見せませう」女「イヤモほんの心計。宜しうお頼申上ます。コレ小太郎、ちよつと隣村迄往て來る程に、おとなしうして待つて居や。惡あがきせまいぞ。御内證樣、往て參じましよ」と、表へ出れば、小「母樣わしも行きたい」と、縋り付を振放し、女「嗜めよ、大きな形して跡追のか。御覽じませ、まだ頑是がござりませぬ」戸「ソリヤ道理いな、ドリヤおばがよい物やりましよ。つい戻つてやらんせ」と日でしらすれば、女「アイ〳〵　つるちよつと一走」と、跡追子にも引さるゝ、振りかへり見返りて、下部引連れ急ぎ行。戸「どりやこちの子と近付に」と、若君の傍へ寄、機嫌紛らす折からに、立歸る主の源藏、常にかはつて色青ざめ、内入惡く子供を見廻り、「エヽ氏より育といふに、繁華の地と違ひ、いづれを見ても山家育、世話甲斐もなき役に立たず」と思有げに見へければ、心ならず女房立寄、「いつ、〳〵い顏色も惡し。振廻の酒機嫌かはしらぬが、山家育は知て有子供、僭躰口は聞へも惡い。殊に今日は、約束の子が寺入りして居ます る、惡い人と思ふも氣の毒。機嫌直して、逢てやつて下され」と、小太郎連て引合せど、差俯いて思案の躰、幼氣に手をつかへ「お師匠樣、今から頼み上ます」と、いふに及ばず振り仰向、急度見るより暫くは、打守り居たりしが、忽面色柔らぎ、「扨々、器量勝れ

御内證―お内儀
つい戻つて―直ぐ戻つてやつて下さい
いふに及ばず―いふに思はず驚

て氣高い生付。公家高家の御子息といふても、おそらく恥しからず。ハテ扨、そなたはよい子じやなふ」と、機嫌直れば女房も、「何とよい子、よい弟子でござんしよが」源「好い共〳〵上々吉。シテ其連て來たお袋は何國に」戸「サお前の留守なら、其間に隣村迄往て來といふて」源「ヲヽ夫もよし〳〵大極上。先子供と奥へやり、機嫌よふ遊ばし召れ」戸「それ皆お暇が出た。小太郎共に奥へ〳〵」と、若君諸共誘はせ、跡先見廻し夫に向ひ、「最前の顔色は常ならぬ吃相、合點の行ぬと思ふた所に、今又あの子を見て、打てかへての機嫌顔、猶以て合點行ず。どふやら樣子が有そふな。氣づかひな聞して」と問ば、源藏「ホホウ氣づがひな筈。今日村の饗應と偽り、某を庄屋の方へ呼付、時平が家來春藤玄蕃、今一人は菅丞相の御恩を被ながら、時平に隨ふ松王丸。此奴病ほうけながら、見分の役と見へ、數百人にて追取卷。汝が方に菅丞相の一子菅秀才、我子としてかくまふよし、訴人有て明白、急ぎ首討て出すや否や、但し踏ん込請取ふや、返答如何にと退引ならぬ手詰。是非に及ばず首討て渡そふと請合た心は、數多有寺子の内、いづれ成共身がはりと、思ふて歸る道すがら、あれか是かと指折ても、玉簾の中の誕生と、菰垂の中で育つたとは似ても似付ず。所詮御運の末成か、いたはしや淺ましや、と暦所の歩で歸り

子供と―子供と一緒に

病ほうけ―病衰へ

相顔―人相形ちと瑠璃天狗にあり

しが、天道のひかへ強きにや、あの寺入の子を見れば、まんざら烏を鷦共云れぬ器量。一旦身がはりで欺き、此場さへ遁れたらば、直に河内へお供する思案。今暫くが大事の場所」と、語れば女房、「待んせや。其松王といふ奴は、三つ子の内の悪者、若君の顔はよふ見知て居るぞへ」源「サアそこが一かばちか　生顔と死顔は相顔のかはる物、面ざし似たる小太郎が首、よもや曙とは思ふまじ。よし又夫と顯はれたらば、松王めを眞二つ、殘る奴原切て捨、叶はぬ時は若君諸共、死出三途の御供、と胸を居たが一つの難義、今にも小大郎が母親、迎ひに來たらば何とせん、此義に當惑。指當つたは此難義」戸「イヤ其事は氣づかひ有な。女子同士の口先で、ちよつぽくさ欺して見よ」源「イヤ其手では行まい。大事は小事より顯はるゝ、事に寄たら母諸共」戸「エヽイ」源「こりややい、若君には替られぬ。お主の爲を辨へよ」といふに胸すへ、戸「左樣でござんす、氣弱ふては仕損ぜん。鬼に成て」と夫婦は突立、互に顔を見合せて、「弟子子といへば我子も同然。サ今日に限つて寺入したは　あの子が業か、母御の因果か。報は此方が火の車、追付廻つて來ませふ」と、妻が歎けば夫も目をすり、源「せまじき物は宮づかへ」と、共に涙にくれ居たる。かゝる所へ春藤玄番、顔見る役は松王丸、病苦を助る駕乘物、門口に舁居れば、跡

には大勢村の者、附隨ふて、「申上ます。皆是におる者の子供が、手習に參つております。若取違へ首討れては、取返が成ませぬ。何卒お戻し下され」と願へば玄蕃、「ャァかしましい蠅虫奴等、うぬらが小悴の事迄、身共がしつた事か。勝手次第に連失せふ」と、呵りつくれば松王丸「ヤレお待なされ暫く」と、駕より出るも刀を杖、「憚りながら、彼等迚も油斷はならぬ。病中ながら拙者めが見分の役勤るも、外に菅秀才の顔見しりし者なき故。今日の役目仕課すれば、病身の願ひ御暇下さるべしと、有難き御意の趣、疎には致されず。菅丞相の所縁の者、此村に置からは、百姓共もぐるになつて、銘々が躰に仕立、助けて歸る手も有事。コリャやい百姓めら、ざは〳〵とぬかさず共、一人づつ呼出せ。面改めて戻してくりよ」と、退引させぬ釘鎹、打ばひどけの内には夫婦、兼て覺悟も今更に、胸慄かす計なり。表は夫共白髪の親仁、門口より聲高に、甲「長松よ〳〵」と呼出せば、「ヲッ」ト答へて出でくるは、椀白顔に墨べつたり、似ても似付ぬ雪と墨、「是ではない」と赦しやる。乙「岩松は居ぬか」と呼聲に、岩「祖父様何じや」と行域て、出くる子供の頑是なき、顔は丸顔きみしり茄子、「詮義に及ばぬ連れうせふ」と、睨付けられ、「ヲ怖ぐる」嫁にもくはさぬ此孫を、命の花落遁れし」と、祖父が抱へて走り行。次は十五の涎く

ぐる—共謀。

きみしり茄子—秋茄子嫁に食はすなの諺をとる

り、丙「ぼんよ〳〵」と親父が手招き、涎「父よ、おれはもふ爰から抱れて往の」と、あまへる顔は馬顔で、聲蚤、丙「ヲ泣な、抱てやらふ」と干鮭を、猫なで親がくはへ行く。工「私が躰は器量よし、お見違へ下さるな」と、斷いふて呼出すは、色白じろと瓜實顔、「こいつ胡亂」と引捕へ、見れば首筋眞黑々、墨か黶かはしらね共、「こいつでない」と突放す。其外山家奥在所の、子供殘らず呼出して、見せても〳〵似ぬこそ道理、土が產した計芋、子ばかりよつて立歸る。スハ身の上と源藏も、妻の戸浪も胴を居、待間程なく入來る兩人、玄「ヤア源藏、此玄蕃が目の前で、討て渡そと請合た菅秀才が首、サア請取ふ。早く渡せ」と手詰の催促、ちつ共臆せず、源「假初ならぬ右大臣の若君、搔首捻首にも致されず。暫くは御用捨」と、立上るを松王丸、「ヤア其手はくはぬ。暫しの用捨と隙どらせ、逃支度しても、裏道へは數百人を付置、蟻の這出る所もない。生顏と死顏は相顏がかはるなどと、身替の贋首、夫もたべぬ。古手な事して後悔すな」と、いはれてぐつとせき上、源「ヤアいらざる馬鹿念。病みほうけた汝が目玉がでんぐり返り、逆樣眼で見やうはしらず、紛もなき菅秀才の首、追付見せう」松「ヲヽ其舌の根の乾かぬ内に早く討、とく切」と玄蕃が權柄、ハット計に源藏は、胸を居てぞ入にける。傍に聞居る女房は、爰ぞ

たべぬ—其譯にのちぬ

大事と心も空、檢使は四方八方に、眼を配る中にも松王、机文庫の數を見廻し、「ヤア合點の行ぬ、先達て往んだ小悴等は以上八人、机の數が一脚多い。其躰は何所におるぞ」と、見咎められて戸浪ははつと、戸「イヤこりや今日初めて寺、イヤ寺參した子がござんす」松「何馬鹿な」戸「ヲヽそれ〳〵、是が則菅秀才のお机文庫」と、木地を隱した塗机、ざつとさばいて言拔る。松「何にもせよ際どらすが油斷の元」と玄蕃諸共つつ立上る。こなたは手詰命の瀬戸際、奥にはばつたり首討音、はつと女房胸を抱き、踏ん込足もけしとむ内、武部源藏白臺に、首桶乘てしづ〳〵出、目通りに指置、源「是非に及ばず、菅秀才の御首討奉る。いはゞ大事ない御首、性根をすへてサア松王丸、しつかりと見分せよ」と、忍の鍔元くつろげて、虚といはゞ切付ん、實といはゞ助けんと、堅唾を呑で扣へ居る。松「ハヽヽヽ何の是しきに、性根所か。今淨玻璃の鏡にかけ、鐵札か金札か、地獄極樂の境。家來衆、源藏夫婦を取卷めされ」「畏つた」と捕手の人數十手振て立ちかゝる。女房戸浪も身を固め、夫は元より一生懸命、「サア實檢せよ見分」と、いふ一言も命がけ。後は捕手向ふは曲者、玄蕃は始終眼を配り、爰ぞ絶躰絶命と思ふ内、早首桶引寄、蓋引明けた首は小太郎、贋といふたら一討と早拔かける。戸浪は祈願、天道樣佛神樣憐み

木地を隱した—素性を隱すにかく

けしとむ—膽を消し飛ぶ

大事ない—大事なる

淨玻璃の鏡—罪人の善惡を映す鏡（十王經）

鐵札金札—善を金箔に記し惡を鐵札に記す卽ち善と惡をいふ（瑠璃天狗）

給へと女の念力、眼力光らす松王が、ためつすがめつ窺ひ見て、「ムウこりや菅秀才の首討たは、まがひなし相違なし」と、いふにも恂り源藏夫婦、傍きよろ〳〵見合せり。檢使の玄蕃は見分の詞證據に、「出かした出かした、よく討た。褒美にはかくまふた科赦して、くれる。トサ松王丸、片時も早く、時平公へお目にかけん」松「いか樣隙取つてはお咎もいかど。拙者は是よりお暇給はり、病氣保養致たし」玄「ヲヽ役目は濟だ勝手にせよ」と首請取玄蕃は館へ、松王は駕にゆられて立歸る。夫婦は門の戸ひつしやりしめ、物も得いはず青息吐息、五色の息を一時に、ほつと吹出す計なり。胸撫でおろし源藏は、天を拜し地を拜し、「ア、有がたや忝や、凡人ならぬ我君の、御聖德が顯はれて、松王めが眼が眏み、若君と見定めて歸つたは、天成不思議のなす所。御壽命は萬々年　悦べ女房」戸「イヤもふ〳〵大抵の事じやござんせぬ。あの松王めが眼の玉へ、菅丞相樣がはいつてござつたか、但し首が黃金佛ではなかつたか。似たといふても瓦と金、寶の花の御運開、と餘り嬉しうて涙がこぼれる。ハアヽ有がたや尊や」と、悅びいさむ折からに、小太郎が母いきせきと、迎ひと見へて門の戸たゝき、「寺入の子の母でござんす。今漸歸りました」と、いふ聲聞より又惱り、「一つ遁れて又一つ、こりやマア何と、どふせふ」

いきせきー息端にてあへぐこと

しれものーぬかちぬもの

と、妻が騒けど夫は胴すへ、源「コリヤ最前いふたは爰の事。若君には替へられぬ、狼狽者」と戸浪を引退け、門の戸ぐはらりと引明れば、女は會釋し、「コレハまあ〳〵お師匠様でござりますか。悪さをお頼申ます。何處に居やるぞ、お邪魔であろに」といふを幸、源「イヤ奥に子供と遊んで居ます。連立て歸られよ」と眞顔でいへば、女「ヲ、そんなら連て歸りましよ」と、ずつと通るを後ろより、只一討と切付る。女もしれ者ひつぱづし、逃げても逃がさぬ源藏が、刃するどく切付るを、我子の文庫ではつしと請とめ、「コレ待た、待たせ、こりやどふじや」と、刎る刃も用捨なく、又切付る文庫は二つ、中よりばらりと經帷子、南無阿彌陀佛の六字の幡、顯れ出しはコハいかに、と不思議の思に釼もなまり、進み兼てぞ見へにける。小太郎が母涙ながら、「若君菅秀才のお身がはり お役に立て下さつたか。まだか様子が聞たい」といふに惱り、源「シテ〳〵それは得心か」女「得心なりやこそ此經帷子六字の幡」源「ムウして其元は、何人の御内證」と、尋る内に門口より、「梅は飛櫻はかるゝ世の中に、何とて松のつれなかるらん。女房悦べ、躰はお役に立たぞ」と、聞よりわつとせき上て、前後不覺に取亂す。「ヤア未練者め」と呵付、ずつと通るは松王丸、見るに夫婦は二度惚り、「夢か現か夫婦か」と、靳れて詞もなかりしが、武部源藏

心の筈―筈は占に用ふるもの、物のめあて（瑞満天狗）

威儀を正し、「一禮は先跡の事、是迄敵と思ひし松王、打てかはつた所存は如何に。不審さよ」と、尋れば、松「ヲヽ御不審尤、存じの通我々兄弟三人は、銘々に別れて奉公、情なや此松王は、時平公に隨ひ、親兄弟共、肉縁切、御恩請た丞相様へ敵對。主命とはいひながら、皆是此身の因果。何とぞ主從の縁切んと、作病構へ暇の願ひ、菅秀才の首見たらば、暇やらんと今日の役目、よもや貴殿が討はせまい、なれども身がはりに立べき一子なくば如何せん、爰ぞ御恩報ずる時、と女房千代と云合せ、二人の中の躬をば、先へ廻して此身がはり、机の數を改めしも、我子は來たかと心の著。菅丞相には我性根を見込給ひ、何とて松の難面からふぞとの御歌を松はつれない〳〵と、世上の口にかゝる悔しさ、推量有源藏殿。躬がなくば何日迄も、人でなしといはれんに、持べきものは子なるぞや」といふに女房猶せき上、「草葉の蔭で小太郎が、聞て嬉しう思ひましよ。持べき物は子なるとは、彼子が爲に好い手向、思へば最前別れた時、いつにない跡追たを呵つた時の其悲しさ。冥途の旅へ寺入と早虫が知らせたか。隣村へ行といふて、道迄いんで見たれ共、子を殺さしにおこして置て、どふマア家へいなるゝ物ぞ。死顔成共今一度見たさに、未練と笑ふて下さんすな。包みし祝義はあの子が香奠、四十九日の蒸物

迄、持て寺入さすといふ、悲しい事が世に有ぶか。育も生も賤しくは、殺す心も有まいに、死る子は媚よし、と美しう生れたが、可愛や其身の不仕合。何の因果に疱瘡迄、仕廻た事じや」とせき上て、かつぱと伏て泣ければ、共に悲しむ戸浪は立寄、「最前にナ、連合の身がはりと思ひ付た傍へ往て、お師匠様今から頼み上ます　といふた時の事思ひ出せば、他人の私さへ骨身が碎ける。親御の身ではお道理」と涙添れば、松「イヤ是御内證。コリヤ女房も何でほへる。覺悟した御身がはり、内で存分ほへたでないか、御夫婦の手前も有。イヤ何源藏殿、申付てはおこしたれ共、定めて最期の節、未練な死を致した御座らふ」源「イヤ若君菅秀才の御身がはりと云聞したれば、潔ふ首指のべ」松「アノ逃隱れも致さずにナ」源「につこりと笑ふて」松「ムヽヽヽヽヽ、出かしおりました、利口な奴立派な奴。健氣な八つや九つで、親にかはつて恩おくり、お役に立は孝行者、手柄者と思ふから、思ひ出すは櫻丸、御恩も送らず先達し、嘸や草葉の蔭よりも、羨しかろけなりかろ。躬が事を思ふに付、思ひ出さるゝ」と、流石同腹同性を、忘れ兼たる悲歎の涙。千代「なふ其伯父御に、小太郎が逢ますわいの」と、取付てわつと計に泣沈む。歎も洩て菅秀才、一間の内より立出給ひ、「我にかはると知ならば、此悲しみさすまいに、可

死る子は云云―死ぬる子はよく見ゆ、此話土佐日記にあり

八つ―奴にかく

愛の者や」と御袖をしぼり給へば、夫婦ははつと倶に浸する有がた涙。「次手ながら若君様へ御土産」と松王つゝ立、「申付た用意の乘物、早く〳〵」と呼はるにぞ、「ハツ」ト答へて家來共、御目通に舁居る。「早御出」と戸を開けば、菅丞相の御臺所、秀「ナウ母様か」御臺「我子か」と、御親子不思議の御對面、源藏夫婦横手を打、「方々と御行衛尋しに、何處にか御座なされし」松「サレバ〳〵北嵯峨の御隱家、時平の家來が聞出し、召捕に向ふと聞、某山伏の姿と成、危い所奪取つたり。急ぎ河内の國へ御供なされ、姫君にも御對面。」コリヤ〳〵女房、小太郎が死骸あの乘物へ移し入、野邊の送り營まん」千代「アイ」と返事の其中に、戸浪が心得抱て來る、死骸を遶餘の乘物へ、乘て夫婦が上著を取ば、哀や内より覺悟の用意、下に白むく無垢麻上下。心を察して源藏夫婦、「野邊の送りに親の身で、子を送る法はなし。我々夫婦がかはらん」と、立寄ば松王丸、「イヤ〳〵是は我子に有ず。菅秀才の亡骸を御供申。いづれもは門火々々〳〵」と、門火を頼み頼まるゝ、御臺若君諸共にしやくり上たる御涙、冥途の旅へ寺入の、師匠は彌陀佛、釋迦牟尼佛、六道能化の弟子になり、賽の川原で砂手本、いろは書子のあへなくも、ちりぬる命是非もなや、あすの夜たれか添乳せん、らむ憂目見る親心、劒と死出の山けこへ、あさき夢見し心地し

門火―喪出之日門前燃火（顏氏家訓）六道能化―六道に迷ふものを化導する地藏菩薩

て、跡は門火にゐひもせず、京は故郷と立別れ、鳥邊野さして連歸る。

鳥邊野―火葬地

第五

雲井長閑き大内山、早立かはる水無月下旬、日毎々々に時違へず、電光雷火霹靂、打續いての天變只事ならず、玉躰安全雷除の加持有んと、勅使三度の召に應じ、法性坊の阿闍梨參内有、紫宸殿に壇を構へ、幣帛押立、獨鈷三鈷鈴錫杖、ふり立〳〵祈らるゝ、擁護も嘸と知られける。寛平法皇の御使として、判官代輝國、齋世親王、刈屋姫、菅秀才を伴ひ、御階のもとに伺公する。僧正壇より下り給ひ、「能こそ參内ましませし」と、親王の御手を取、上座に移し參らすれば、輝國階下に頭をさげ、「兼て法皇貴僧に談じ給ひし通り、菅秀才に菅原の家相續、天機宣しき次手を以て、御沙汰有て給はりしか、承つて參れとの使ぞふ」と述ければ、親王も僧正に向はせ給ひ、「此度の天變察する所、無實の罪に沈んだる、菅丞相の所爲なるべし。此靈魂を鎭めんには、法皇の仰のごとく、菅秀才が勅勘を赦され、菅家再び取立給はゞ、亡魂も恨を晴し、天下萬民の悅是にしかじ。偏に貴僧に賴み入。次には麿が虛命の逆鱗、申晴して給はれ」と、事叮嚀に述給へ

雲井云々―禁裡
獨鈷三鈷―眞言宗の僧の修法の用具
紫宸殿―禁中の表御殿
使ぞふ―使に候
逆鱗―天子の御怒り

ば、呵「仰のごとく菅丞相、恨は晴れぬ天變不順。愚僧元來菅丞相とは師弟の中、靈魂の怒を休むる菅原の家相續、宜しく奏し奉らん。法皇御所へも此通、輝國申上げらるべし。各は此方へ」と打連奥に入給へば、判官代大きに悅び、「僧正の御請合法皇に申上、追付參上仕らん」と、心いそ〳〵立歸る。齋世親王、菅家の兄弟、密に參内致せし、と春藤玄蕃が知らせによつて、時平の大臣大きに驚き、希世清行前後に隨へ、逸散にかけ來り、寢殿遙に窺ひ見れば、實も玄蕃が申に違はず。時「時平が怨と成奴原、片端打殺し、天皇法皇遠島させ、我萬乘の位に卽かん。清行希世ぬかるな」と、八方へ眼を配り、事を窺ひ待共しらず、「判官代は歸りしか」と、奥より出る菅秀才、「ソレ」と時平が掛聲に、左中辨つゝと寄、小腕取て捻伏せたり。時平の大臣から〳〵と打笑ひ、「蠅同然の小躰なれ共、生置ては後日の仇。首討たると思ひしに、小ざかしくも我を謀り、今日迄存命せしは、松王めが計ひよな。饗首喰ふたうつそりめ」と、春藤玄蕃が肩骨つかみ、「不忠油斷の見せしめ」と、首引抜てかしこへ投捨、「ヤア〳〵兩人、此小躰は丸に任せ、齋世親王刈屋姫引立參れ」と下知するにぞ、清行希世「心得し」と、奥をさして行所に、俄に晴天かき曇り、風雨發つて絶間なく、電光虛空に閃めき渡り、天地も崩るゝ大雷、ば

寢殿—母屋

うつそりー—まぬけ

三善―見る間にとかく

ち〳〵〳〵ぐばら〳〵。二人はがち〳〵胴震ひ、色青さめて逃まどふ。時平の大臣はびく共せず、「ヤア臆病な腰抜共。鳴ば鳴れ落ば落よ。雷神雷火も足下にかけ、踏消してくれんず物」と、菅秀才を小脇にかい込、虚空を睨んでつつ立たり。猶もはためく震動雷電、希世は生たる心地なく、御階の下にかどみ居る、頭の上に車輪の火の玉、落ると見へしが左中辨、五體炎に燃爛れ、天罰目の前師匠の罰、心地よかりし最後なり。是にも屈せぬ強氣の時平、「三善の清貫いづくに有。丸に敵する雷神なし。怖くば爰に來れよ」と、呼を力に立寄清貫、あはやと三善も雷火に打れ、即時に息は絶果たり。二人が最後にさしもの時平、心臆して膝わなゝく、擒にしたる菅秀才、逃て行衛もしらばこそ。「此上頼は法力」と、壇上にかけ上り、兩手を覆ふて蹞る、左右の耳より尺餘の小蛇、顯はれ出れば悶絶し、うんとのつけに反りかへれば、二疋の小蛇は抜出て、壇に立つたる幣帛に、入よと見へしが忽に、此世を去し櫻丸、夫婦が姿と顯れ出、影のごとく壇上にすつくと立、歌「腹立や恨めしや、汝故に菅丞相、無實の罪にうきしづみ、心筑紫に果給ふ、其怨念は晴やらぬ、空に轟き鳴神の、炎變じて紅櫻と、俱に散らさん來れや來れ」と、頭を摑んで引立る。音に驚き法性坊、紫宸殿にかけ出て見給へば、物の怪の

千手の陀羅尼―眞言の祕密經

姿ありく、有明櫻、祈加持して退けんずもの、と珠數さらさらと押もんで、千手の陀羅尼くりかけく、祈いのれば、時平は夢共現共、思はずしらず立上れば、櫻夫婦が妄執の雲霧に隔られ、形は見へて手に取れず、逃んとするを逃さじと、向にたちまち八重一重、刃にかゝり此世をさり、骸は終に呵責の火櫻、此身を焦す鹽竈櫻、いかに僧正折る共、此怨念は何時迄も、つきまとはつて糸櫻、退かじ放れじ幻は、うて共さらぬ犬櫻、「死靈を去らさで置べきか」と、揉みかけく祈給へば、夫婦が靈魂、「イヤ〳〵〳〵イヤく、如何程祈る共、我々諸共、冥途の苦患見すべし」と寄ばいのり、祈れば形は、見へつ隱れつ九重の、彼岸櫻とちりぐに、僧正の珠數先へ恐れて寄ぬぞ不思議なる。紫宸殿に僧正あれば、弘徽殿に夫婦の姿、弘徽殿に移り給へば、清涼殿に死靈の形、清涼殿に移り給へば、梨壺梅壺夜の御殿晝の御座、行違ひ行廻り、祈るは僧正去らぬは怨靈、揉合ひく、祈伏せられ櫻丸、「ヤアく僧正、菅丞相を讒言し、帝位を奪ふ時平を助け玉ふは心得ず。扨は貴僧も朝敵に力を添へ給ふか」と、聞より僧正大きに驚き、「ヤアかゝる天下の仇共しらで、珠數をけがせし勿體なや」と、法座を立去り入給へば、時平も恐れ諸共に、御座の間さして逃入を、髻を取て引戻し、「今こそは思の儘に冥路の

弘徽殿―後宮の殿舍の名
清涼殿―帝の常の御所
梨壺梅壺―いづれも後宮の殿舍の名

闇路に伴はん」と、櫻の枝の笞杖を振上、追立〳〵追廻し、笞を持つてちやう〳〵〳〵打れて現、空蟬の蛻の體、「扨こそ恨晴れたり」と、死靈は時平を庭上に、どふど蹴落し嬉しけに、形は花の散ごとく、消て見へねば丞相の、靈も鎮り空晴れて、日輪光り輝けり。斯と見るより菅秀才、刈屋姫庭上に走り出、「父上の敵遁さじ」と、用意の懷劍抜放し、「恨の刀思ひしれ」と指通し〳〵、悅び給ふ折こそ有、宮御夫婦、若君の安否如何と松王丸、輝國伴ひ參内すれば、白大夫梅王も、宰府より立歸り、御階の下に伺公して、櫻丸夫婦が怨念、時平が惡事を顯はせし子細を聞より人々喜悅、俱に悅ぶ法性坊、親王を伴ひ立出給ひ、人々の願ひのごとく、菅秀才には菅原の遺跡を立させ、菅丞相に正一位の贈官あり、右近の馬場に社を築き、南無天滿大自在天神と崇め、皇居の守護神たるべしとの宣旨なりと述給へば、皆一同に悅を、きくに北野の千本松、榮へ榮ふる御社は、千年萬年朽せぬ宮殿、錦の帳玻璃の柱、瑪瑙の梁、瑠璃の垂木、廻廊拜殿有々と、拜まれさせ給ひける。京に北野難波に天滿、神德奇瑞竝びなく、榮へ在す此御神、緣起をあら〳〵書殘す、筆の冥加や御傳授の、傳はる和國に炳然、威德を崇め奉る。

きくに北野―きくに來たとかく